

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	有田 栄
主な担当科目	音楽美学,西洋音楽史Ⅰ,西洋文化史Ⅰ,西洋文化史Ⅱ,音楽教養基礎,音楽教養演習Ⅰ,音楽教養演習Ⅱ,音楽教養演習Ⅲ,卒業研究,課題研究Ⅰ,西洋音楽史特殊講義,音楽研究法基礎,課題研究Ⅱ,博士音楽美学特講Ⅰ
シラバス	次ページをご参照ください
2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	①ますます多様化する学生に対して、きめ細かく適切な指導を行うこと。②新しいツールであるICTを積極的に活用し、学生とのコミュニケーションを図ること。③研究倫理・職業倫理等に対する学生の意識を向上させる取り組みに力を入れる。④学部・短大では、学生が学修に対するモチベーションを保つことができるように緩急ある授業を行う。⑤大学院については、各分野の専門性に対する学生の意識を高めるために、教員も新しい情報や知見を取り入れ、自身の「常識」のアップデートを行う。⑥引き続きコロナ禍の状況に鑑み、学生の物理的・心理的学修環境に気を配る。
2022年の教育に関する自己評価	学修環境が不安定な学生が多いことを考慮して、本年度も主要科目で授業外の補習や、留学生のための導入的な特別講座を複数実施した。また、通年科目の中間の試験結果が後期のモチベーションに影響することから、中間試験(前期参考試験)の段階で追試や再試を何度も行い、学修内容を定着させることに力を入れ、目に見える成果を得た。新しいコースの立ち上げもあったことから、学生の進路相談にも一層丁寧に応じ、問題を学生と共に解決しようと試みた。
2022年のFD活動に関する自己評価	学部・短大・研究科FD委員長として、大学全体および学内組織のFD活動に積極的に取り組んだ。大学全体のFDとしては、現代の大学教員に必要な情報や職能開発、社会から求められる資質は何であるかを常にリサーチし、研修会テーマ等として積極的に提案している。学内組織FD研修会としては、専任・非常勤教員相互の連携とコミュニケーションの向上にとりわけ重点的に取り組んだ。また他学内組織の教員との連絡・連携、情報共有に努めた。
授業改善のために取り入れた研修内容	①「多様な背景を持つ学生が持続的に学べる学修環境を作るために——障がいのある学生への支援・関わりについて」から、障害を持つ学生が認知・認識しやすい授業の組み立て、必要な配慮についての知識。 ②ICTを活用した授業支援ツール、③学生課による「多様な学生への対応について」

科目名－クラス名

音楽美学

A

曜日時限

月 2時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
講義	3～	通年	4	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽美学は、「音楽や芸術についての考え方」を学ぶ科目です。

音楽とは何か、という考え方は時代によって全く異なっており、社会や、人々の音楽生活、楽器や作曲技法の変化とともに移り変わっていきます。

授業では、古代から現代までの「音楽や芸術についての考え方」の変化をたどりながら、そこから私たちはどのようなヒントが得られるか、演奏や創作の表現あるいは音楽の楽しみ方にどのように生かせるかを考えていきます。その際、音楽史はもちろん、ヨーロッパ文化史・精神史などの知識も参照し、さまざまな音楽の思想が実際の音楽にどのように表われているかを学びます。

音楽家として社会に出て行く前に、先人の考え方に刺激を受け、ぜひ自分と音楽とのかかわりをじっくり考える機会にしてください。

学修成果

音楽の歴史を、「西洋音楽史」とは異なる視点から、つまり人間の「音楽観」の歴史として学ぶことができる。

日常的に接する音楽作品の背景にあるものを、深く理解することができる。またそれを通じて、現代の私たち自身が、どのように音楽と向き合うべきか、それを考える「手がかり」を得ることができる。

さらには提示された課題について、考えをまとめ、論理的に記述する技術を身につけることができる。

授業展開と内容

- 第1回 音楽美学への招待
～「音楽美学」とはどのような学問か
- 第2回 古代ヨーロッパの芸術論① ギリシア神話にみる古代の芸術観
～「調和の学問」としての音楽
- 第3回 古代ヨーロッパの芸術論② ギリシャの学問と芸術観
～万物の根源と本質への問い
- 第4回 古代ヨーロッパの芸術論③ プラトンとアリストテレスの芸術観
～「表現」とは何か／芸術の2つのモデルと「表現」の意味
- 第5回 古代ヨーロッパの芸術論④ 音楽文化におけるヘレニズム、ヘブライズムとその影響
～ギリシャ・ローマ的なものとヘブライ的なもの葛藤／キケローとクィンティリアヌスの修辞学
- 第6回 中世ヨーロッパの芸術論① キリスト教世界と中世の音楽観
- 第7回 中世ヨーロッパの芸術論② 新プラトン主義と芸術
～プラトンの継承とキリスト的世界観との葛藤
- 第8回 中世ヨーロッパの芸術論③ 中世の音楽観
～アウグスティヌス／ボエティウスと「ムシカ」の概念／「音楽家」とは
- 第9回 中世ヨーロッパの芸術論④ アリストテレスの復権と新しい芸術論
～「学問」から「アート（技術）」へ
- 第10回 ルネサンス・バロック期の芸術論① ルネサンスの理想と芸術
～「ルネサンス」の概念と理想郷としての「古代ギリシャ」
- 第11回 ルネサンス・バロック期の芸術論② ルネサンスの音楽理論家たち
～音楽における「理論」と「実践」
- 第12回 ルネサンス・バロック期の芸術論③ 音楽は何を表現するか
～音楽の本質と鳴り響きについての壮大な物語
- 第13回 ルネサンス・バロック期の芸術論④ 「アフェクト」と「フィギュール」の実際
～音楽を読み解く秘密を知ろう
- 第14回 ルネサンス・バロック期の芸術論⑤ 「感情」の学としての音楽と音楽修辞法
～修辞的表現は究極的に何を伝えているのか／「アフェクテンレーレ」と「フィグレンレーレ」／ムシカ・レセルヴァータ（とっておきの音楽）の概念
- 第15回 まとめ
- 第16回 18世紀の芸術論① 音楽史の新しい時代と教養ある音楽家
～マッテゾンと調性格論
- 第17回 18世紀の芸術論② 「理性」と「感覚」
～人はどのようにして「美」を知るか
- 第18回 18世紀の芸術論③ 芸術における「自然」とは

	～「自然」は芸術の源泉か、ライバルか
第19回	18世紀の芸術論④ 啓蒙思想と芸術家たち ～市民の社会における芸術の役割
第20回	19世紀の芸術論① ロマン主義とは何か ～「ノスタルジー」の思想と芸術
第21回	19世紀の芸術論② 芸術における「偉大さ」 ～社会が芸術に求めるもの
第22回	19世紀の芸術論③ ヘーゲルの思想とベートーヴェン ～革命の時代における「変化」と「発展」の概念
第23回	19世紀の芸術論④ 歴史主義と芸術 ～「過去」が作る価値
第24回	19世紀の芸術論⑤ 絶対音楽と標題音楽 ～音楽の「意味」とは…音楽の「うち」と「そと」、自律と他律の概念／「音そのもの」という思想とその歴史的背景
第25回	19世紀の芸術論⑥ ショーペンハウアーの思想とヴァグナー ～「未来」への投企
第26回	20世紀と現代の芸術論① 世界観の変化と芸術の価値 ～脱-中心化する芸術
第27回	20世紀と現代の芸術論② 「表現すること」から「聴くこと」へ
第28回	20世紀と現代の芸術論③ 非西洋の音楽思想 ～ジョン・ケージの思想と音楽
第29回	20世紀と現代の芸術論④ 非西洋の音楽思想 ～武満徹の音楽観と作品／東洋の音楽家たちの音楽観と作品
第30回	まとめ

履修上の注意

「自分はこの授業で何を学びに来たのか」という問題意識を常に持って授業に臨むことが重要。ノートをしっかり取り、復習を必ず行うこと。授業進度は、受講者の理解度等や、内容の進展により上記区分とずれる可能性がある。初回には、学びの出発点となる課題を出題するので、受講予定者は必ず出席のこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

音楽美学を学ぶためには、基本的な音楽史の知識はもちろんのこと、さまざまなジャンルの作品についての知識、そして何より音楽家としての経験や問題意識が自分自身の中で深まっていることが必要である。授業には、各自が問題意識や「問いかけ」をもって臨み、また授業で学んだことを、常に自分自身の専門の学びに照らしながら考えるように心がけること。科目の性格上、授業内はもちろん、授業外の時間に「常に考えること」が求められる。最も重要なことは、その日の授業で学んだ事柄の中で、自分にとって印書的事柄であったこと、もっと知りたいと思ったこと

教科書・参考書

教科書は指定せず、必要に応じて資料を配付する。各自ファイルしてきちんと管理すること。そのほかは、授業で紹介する。

科目名－クラス名

音楽美学

音楽と社会 A

曜日時限

月 2時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	2～	通年	4	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽美学は、「音楽や芸術についての考え方」を学ぶ科目です。

音楽とは何か、という考え方は時代によって全く異なっており、社会や、人々の音楽生活、楽器や作曲技法の変化とともに移り変わっていきます。

授業では、古代から現代までの「音楽や芸術についての考え方」の変化をたどりながら、そこから私たちはどのようなヒントが得られるか、演奏や創作の表現あるいは音楽の楽しみ方にどのように生かせるかを考えていきます。その際、音楽史はもちろん、ヨーロッパ文化史・精神史などの知識も参照し、さまざまな音楽の思想が実際の音楽にどの

学修成果

音楽の歴史を、「西洋音楽史」とは異なる視点から、つまり人間の「音楽観」の歴史として学ぶことができる。

日常的に接する音楽作品の背景にあるものを、深く理解することができる。またそれを通じて、現代の私たち自身が、どのように音楽と向き合うべきか、それを考える「手がかり」を得ることができる。

さらには提示された課題について、考えをまとめ、論理的に記述する技術を身につけることができる。

授業展開と内容

- 第1回 音楽美学への招待
～「音楽美学」とはどのような学問か
- 第2回 古代ヨーロッパの芸術論① ギリシア神話にみる古代の芸術観
～「調和の学問」としての音楽
- 第3回 古代ヨーロッパの芸術論② ギリシャの学問と芸術観
～万物の根源と本質への問い
- 第4回 古代ヨーロッパの芸術論③ プラトンとアリストテレスの芸術観
～「表現」とは何か／芸術の2つのモデルと「表現」の意味
- 第5回 古代ヨーロッパの芸術論④ 音楽文化におけるヘレニズム、ヘブライズムとその影響
～ギリシャ・ローマ的なものとヘブライ的なもの葛藤／キケローとクインティリアヌスの修辞学
- 第6回 中世ヨーロッパの芸術論① キリスト教世界と中世の音楽観
- 第7回 中世ヨーロッパの芸術論② 新プラトン主義と芸術
～プラトンの継承とキリスト的世界観との葛藤
- 第8回 中世ヨーロッパの芸術論③ 中世の音楽観
～アウグスティヌス／ボエティウスと「ムシカ」の概念／「音楽家」とは
- 第9回 中世ヨーロッパの芸術論④ アリストテレスの復権と新しい芸術論
～「学問」から「アート（技術）」へ
- 第10回 ルネサンス・バロック期の芸術論① ルネサンスの理想と芸術
～「ルネサンス」の概念と理想郷としての「古代ギリシャ」
- 第11回 ルネサンス・バロック期の芸術論② ルネサンスの音楽理論家たち
～音楽における「理論」と「実践」
- 第12回 ルネサンス・バロック期の芸術論③ 音楽は何を表現するか
～音楽の本質と鳴り響きについての壮大な物語
- 第13回 ルネサンス・バロック期の芸術論④ 「アフェクト」と「フィグール」の実際
～音楽を読み解く秘密を知ろう
- 第14回 ルネサンス・バロック期の芸術論⑤ 「感情」の学としての音楽と音楽修辞法
～修辞的表現は究極的に何を伝えているのか／「アフェクテンレーレ」と「フィグーレンレーレ」／ムシカ・レセルヴァータ（とっておきの音楽）の概念
- 第15回 まとめ
- 第16回 18世紀の芸術論① 音楽史の新しい時代と教養ある音楽家
～マッテゾンと調性格論
- 第17回 18世紀の芸術論② 「理性」と「感覚」
～人はどのようにして「美」を知るか
- 第18回 18世紀の芸術論③ 芸術における「自然」とは
～「自然」は芸術の源泉か、ライバルか

第19回	18世紀の芸術論④ 啓蒙思想と芸術家たち ～市民の社会における芸術の役割
第20回	19世紀の芸術論① ロマン主義とは何か ～「ノスタルジー」の思想と芸術
第21回	19世紀の芸術論② 芸術における「偉大さ」 ～社会が芸術に求めるもの
第22回	19世紀の芸術論③ ヘーゲルの思想とベートーヴェン ～革命の時代における「変化」と「発展」の概念
第23回	19世紀の芸術論④ 歴史主義と芸術 ～「過去」が作る価値
第24回	19世紀の芸術論⑤ 絶対音楽と標題音楽 ～音楽の「意味」とは…音楽の「うち」と「そと」、自律と他律の概念／「音そのもの」という思想とその歴史的背景
第25回	19世紀の芸術論⑥ ショーペンハウアーの思想とヴァグナー ～「未来」への投企
第26回	20世紀と現代の芸術論① 世界観の変化と芸術の価値 ～脱-中心化する芸術
第27回	20世紀と現代の芸術論② 「表現すること」から「聴くこと」へ
第28回	20世紀と現代の芸術論③ 非西洋の音楽思想 ～ジョン・ケージの思想と音楽
第29回	20世紀と現代の芸術論④ 非西洋の音楽思想 ～武満徹の音楽観と作品／東洋の音楽家たちの音楽観と作品
第30回	まとめ

履修上の注意

「自分はこの授業で何を学びに来たのか」という問題意識を常に持って授業に臨むことが重要。ノートをしっかり取り、復習を必ず行うこと。
授業進度は、受講者の理解度等や、内容の進展により上記区分とずれる可能性がある。
初回には、学びの出発点となる課題を出題するので、受講予定者は必ず出席のこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

音楽美学を学ぶためには、基本的な音楽史の知識はもちろんのこと、さまざまなジャンルの作品についての知識、そして何より音楽家としての経験や問題意識が自分自身の中で深まっていることが必要である。授業には、各自が問題意識や「問いかけ」をもって臨み、また授業で学んだことを、常に自分自身の専門の学びに照らしながら考えるように心がけること。科目の性格上、授業内はもちろん、授業外の時間に「常に考えること」が求められる。
最も重要なことは、その日の授業で学んだ事柄の中で、自分にとって印書だったこと、もっと知りたいと思ったこと

教科書・参考書

教科書は指定せず、必要に応じて資料を配付する。各自ファイルしてきちんと管理すること。
そのほかは、授業で紹介する。

科目名－クラス名

西洋音楽史 I

E

曜日時限

月 3時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	1～	通年	4	70	30	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋芸術音楽の歴史について学びます。本学には多彩な音楽史系科目がありますが、なかでも音楽史の学びの第1段階として、この「西洋音楽史 I」の授業の最も重要な目的は、①音楽の歴史の大きな流れ、そして本質的な流れを捉えること。②各時代の様式（音楽的な特徴）のイメージを捉えること。そして③さまざまな様式の音楽に触れることで、音楽人に欠かせない「音楽的な経験」そのものを豊かにすることです。各時代を代表する作曲家や作品について、目（楽譜）と耳（音）と頭（知識）によって理解することを目指します。

クラシック系の楽器や声楽の実技を専攻している学生だけでなく、ジャズ、ポピュラー、ミュージカル、バレエ、アートマネジメント、舞台スタッフ、音楽療法、そして音楽教養、音楽と社会など、音楽にかかわるすべての専攻の学びの基本になるものです。

学修成果

「西洋音楽史」は、これから皆さんが音楽を専門的に学んでいくために必要となる知識を扱う科目です。歴史の流れだけでなく、そこで登場するさまざまな音楽の種類やジャンルについて、また音楽の基本的な形式や楽器についての知識も学びます。これは、将来皆さんが活躍する舞台となる演奏の現場や、音楽ビジネス、音楽教育の現場で必須の知識です。

そのほかにも、授業外学修で多くの音楽を聴いたり、レポートを書いたりすることで、音楽の世界で役に立つさまざまな基本知識やルール、「資料を集め、読み込む力」（文献リテラシー）、「情報を精査し、まとめる力」、「文章表現力」、「作曲者名や曲名などの正しい表記の仕方」などを身につけていきます。

授業展開と内容

第1回 導入：「西洋音楽史」とは何か？

－「西洋」とは、「音楽」とは、「歴史」とは何かに目を向けよう！

第2回 中世①：グレゴリオ聖歌とオルガナム

－中世の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第3回 中世②：宮廷歌人の世界

第4回 中世③：中世の記譜法／アルス・ノヴァとトレチェント

第5回 ルネサンス①：中世からルネサンスへー神のための音楽から、人間のための音楽へールネサンスの音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第6回 ルネサンス②：通模倣様式とその発展

第7回 ルネサンス③：宗教改革と反宗教改革の音楽

第8回 ルネサンス④：目で見える音楽ールネサンスの詩と音楽、色鮮やかな世俗音楽の世界

第9回 バロック①：ルネサンスからバロックへーモノディ歌曲とオペラの誕生ーバロックの音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第10回 バロック②：オペラの発展とナポリ派オペラ

第11回 バロック③：カンタータとオラトリオ

第12回 バロック④：ソナタと組曲ー「言葉のないドラマ」としての器楽の歴史へ

第13回 バロック⑤：協奏曲

第14回 バロック⑥：フーガ

第15回 まとめ：西洋音楽とその歴史の特質ー「音によるドラマ」としての声楽の発展と器楽の台頭

第16回 導入：バロックから古典派へ

第17回 古典派①：「言葉のないドラマ」としての器楽と「ソナタ形式」ー古典派の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第18回 古典派②：ハイドンー弦楽四重奏曲を中心に

第19回 古典派③：モーツァルトーピアノ・ソナタと交響曲を中心に

第20回 古典派④：ベートーヴェンー交響曲を中心に

第21回 古典派⑤：古典派の歌曲とオペラーグルック、モーツァルト、ベートーヴェン

第22回 ロマン派①：古典派からロマン派へー拡大するオーケストラと交響曲ーロマン派の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第23回 ロマン派②：「描く音楽」としての交響詩、民族主義と国民楽派

第24回	ロマン派③：ピアノとピアノ音楽
第25回	ロマン派④：声と楽器の織り成すドラマ ーオペラ
第26回	ロマン派⑤：声と楽器の織り成すドラマ ー歌曲
第27回	近・現代①：ロマン派から近・現代へ ー印象主義と表現主義 ー近・現代の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！
第28回	近・現代②：十二音技法と新古典主義
第29回	近・現代③：ノイズと偶然性の音楽、電子音楽の登場、そして…
第30回	まとめ：ふたたび西洋音楽史の流れを振り返ると、私たちの未来には何が見えるか ー西洋音楽史での学びを、自分自身の演奏や、音楽の聴き方、音楽とのかかわり方に、どのように生かせるかを考えよう

履修上の注意

①コース、学年によってクラス指定がある。ポータルサイトに発表されるので、必ず指定されたクラスで受講すること。原則としてクラス変更はできない。変更する必要がある場合は、履修相談を必ず受けること。②西洋音楽史Ⅰが必修のコースは、今年度は西洋音楽史の履修を優先すること。③初回の授業には必ず出席すること。④教科書は必ず持参すること。⑤提出物の期限を守ること。⑥西洋音楽文化の背景を理解するために、「西洋文化史Ⅰ」「西洋文化史Ⅱ」の両科目（選択科目）を、可能な限り卒業までのいずれかの段階で履修することを勧める。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内容についての理解を深めるためには、授業外学修、特に復習が欠かせない。授業外学修として全員必ず行ってほしいのは、以下の2つである。①授業で取り上げた時代や事柄について、教科書や参考書の該当箇所を読むこと。②授業で取り上げた曲を「ナクソス・ミュージック・ライブラリー（NML）」でもう一度聴くこと（いろいろな演奏者で聴いたり、同じ作曲者の別の曲も聴いてみたりするのはなお良い）。特に1年生は、知識を増やすことも大切だが、それ以上に、積極的に沢山の音楽を聴いて「音楽的経験」を増やすことが重要である。図書館のC

教科書・参考書

教科書（購入必須）：坂崎紀著『西洋音楽史』（アカデミア・ミュージック刊）。

参考書（購入は必須ではないが、興味・理解を深めるための助けとなるもの）：①岸本宏子・酒巻和子・小畑恒夫・石川亮子・有田栄著『つながりと流れがよくわかる 西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング刊）、②近藤謙著『ものがたり西洋音楽史』（岩波ジュニア新書、岩波書店刊）

科目名－クラス名

西洋文化史Ⅰ

曜日時限

水 2時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	1～	前期	2	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

「西洋文化史」は、これから皆さんが音楽を専門的に学んでいくために必要となる「教養」を身につけるための科目です。ヨーロッパの人々はどのような世界観や人間観を持って、私たちがいま学んでいる音楽・芸術の伝統を生み出してきたのか…。こうした問題意識に基づいて、ヨーロッパの芸術文化を知るために不可欠な基礎知識を学びます。

とはいっても、高校までで学んできたいわゆる「世界史」の授業とは異なり、その「知識」とは個々の史実や人物名のものではありません。この授業の目的は、現代から歴史を見る、あるいは歴史から現代を見るという「視点」そのものを学ぶこと、「歴史の学び方」を学ぶことにあります。

前後期は内容的にセットになっており、前期「Ⅰ」は、西洋文化の背景（ヨコの視点）を、後期「Ⅱ」は、西洋史の流れに沿って文化の変遷（タテの視点）を扱います。

「Ⅰ」では、まず「ヨーロッパ」の定義から始めて、現在のヨーロッパを構成している国、言語、民族へと理解を広げていきます。その過程で、「国家とは何か」、「民族とは何か」、「マジョリティ／マイノリティとは何か」といった問いや、ヨーロッパの根深い民族紛争や少数民族問題について、あるいは現代におけるジェノサイドなど社会が直面する問題についても考えていきます。

さらに後半では、ヨーロッパの多層的な社会や芸術文化を読み解くヒントとして、その基層となる精神の文化（ヨーロッパの三大宗教）について学びます。

学修成果

「西洋文化史」で学ぶのは、将来皆さんが活躍する舞台となる演奏の現場や、音楽ビジネス、音楽教育の現場で必須の知識であり、社会人として身につけているべき教養であり、これからの時代を生きていくために求められる知見です。授業で扱ったテーマやトピックを、一朝一夕には理解できないとしても、また学生時代の間に理解できないとしても、「疑問を持ちながら生活すること」を覚えていただき、習慣として身につけてもらいます。

それによって、以下の学修効果を期待します。①音楽・舞台作品の背景や意味を深く理解することができるようになる。②「テキストとしての文化」「テキストとしての歴史」の読み方、歴史の学び方を身につけることができる。③他者・他文化への共感力を高めることができる。

授業展開と内容

第1回 「ヨーロッパ」とは何か①

文化史を学ぶ意味／地理的ヨーロッパ／歴史的ヨーロッパ／政治的ヨーロッパ／文化的ヨーロッパ

第2回 「ヨーロッパ」とは何か②

ヨーロッパの国と民族／民族と言語／民族と宗教／少数民族問題と様々な地域紛争／マジョリティとマイノリティ／現代のジェノサイドとは

第3回 「ヨーロッパ」とは何か③

歴史と現在に見る日本とヨーロッパとの関係／ヨーロッパとアジア・アフリカ・アメリカ大陸との関係

第4回 ヨーロッパの精神文化①

「ヨーロッパ」の根っこには何があるか――ヨーロッパの古層文化概説／神話・童話が伝えるもの

第5回 ヨーロッパの精神文化②

ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教（1）ヨーロッパの成立とキリスト教との関係

第6回 ヨーロッパの精神文化③

ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教（2）キリスト教とは――概要と歴史

第7回 ヨーロッパの精神文化④

ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教（3）文化を知るテキストとしての『聖書』（新約聖書）の世界1～聖書とは何か

第8回 ヨーロッパの精神文化⑤

ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教（4）文化を知るテキストとしての『聖書』（新約聖書）の世界2～聖書と西洋文化

第9回 ヨーロッパの精神文化⑥

ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教（5）キリスト教と人々の生活／キリスト教文化と日本

第10回 ヨーロッパの精神文化⑦

ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教（6）典礼と音楽作品（カトリック、プロテスタント、英国国教会等）

第11回 ヨーロッパの精神文化⑧

ヨーロッパ三大宗教としてのユダヤ教（1）ユダヤ教とは――概要と歴史

第12回 ヨーロッパの精神文化⑨

ヨーロッパ三大宗教としてのユダヤ教（2）文化を知るテキストとしての『聖書』（旧約聖書）の世界

第13回 ヨーロッパの精神文化⑩

ヨーロッパ三大宗教としてのユダヤ教（3）ユダヤ教文化とヨーロッパの社会

第14回 ヨーロッパの精神文化⑪

ヨーロッパ三大宗教としてのイスラーム（1）イスラームとは――概要と歴史

第15回 ヨーロッパの精神文化⑫

ヨーロッパ三大宗教としてのイスラーム（2）イスラームの文化とヨーロッパの社会

第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

卒業するまでのいずれかの年次で、可能な限り受講することが望ましい。
半期科目ではあるが、授業の目的・意図から言えば、内容的には後期の「西洋文化史Ⅱ」と連続して履修することを薦める。
受講予定者は初回に必ず出席のこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業で扱えることには時間的に限りがあるので、自学自習を重んじる。たとえば、普段から自分をとりまく「世界」に興味を持ち、新聞や書籍を読んだり、テレビのドキュメンタリー番組などを積極的に見たりする習慣をつけること。ネット上の情報に敏感であることも重要だが、時間をかけて作り込まれたこれらのアウトプットをじっくり読み込むことはさらに重要である。また、音楽・舞台芸術作品、美術作品、小説、映画、漫画・アニメなどを楽しむ時に、その背景に注意深く考えを巡らす習慣をつけること。それだけでも「西洋文化史」の授業外学修と言える

教科書・参考書

教科書は指定せず、テキストとなる資料をその都度配付する（各自ファイルしてきちんと管理すること）。その他は授業時に紹介する。

科目名－クラス名

西洋文化史 I

曜日時限

水 2時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
講義	1～	前期	2	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

「西洋文化史」は、これから皆さんが音楽を専門的に学んでいくために必要となる「教養」を身につけるための科目です。ヨーロッパの人々はどのような世界観や人間観を持って、私たちがいま学んでいる音楽・芸術の伝統を生み出してきたのか…。こうした問題意識に基づいて、ヨーロッパの芸術文化を知るために不可欠な基礎知識を学びます。

とはいっても、高校までで学んできたいわゆる「世界史」の授業とは異なり、その「知識」とは個々の史実や人物名のことではありません。この授業の目的は、現代から歴史を見る、あるいは歴史から現代を見るとい

学修成果

「西洋文化史」で学ぶのは、将来皆さんが活躍する舞台となる演奏の現場や、音楽ビジネス、音楽教育の現場で必須の知識であり、社会人として身につけているべき教養であり、これからの時代を生きていくために求められる知見です。授業で扱ったテーマやトピックを、一朝一夕には理解できないとしても、また学生時代の間に理解できないとしても、「疑問を持ちながら生活すること」を覚えていただき、習慣として身につけてもらいます。

それによって、以下の学修効果を期待します。①音楽・舞台作品の背景や意味を深く理解することができるようになる

授業展開と内容

- 第1回 「ヨーロッパ」とは何か①
文化史を学ぶ意味／地理的ヨーロッパ／歴史的ヨーロッパ／政治的ヨーロッパ／文化的ヨーロッパ
- 第2回 「ヨーロッパ」とは何か②
ヨーロッパの国と民族／民族と言語／民族と宗教／少数民族問題と様々な地域紛争／マジョリティとマイノリティ／現代のジェノサイドとは
- 第3回 「ヨーロッパ」とは何か③
歴史と現在に見る日本とヨーロッパとの関係／ヨーロッパとアジア・アフリカ・アメリカ大陸との関係
- 第4回 ヨーロッパの精神文化①
「ヨーロッパ」の根っこには何があるか——ヨーロッパの古層文化概説／神話・童話が伝えるもの
- 第5回 ヨーロッパの精神文化②
ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教 (1) ヨーロッパの成立とキリスト教との関係
- 第6回 ヨーロッパの精神文化③
ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教 (2) キリスト教とは——概要と歴史
- 第7回 ヨーロッパの精神文化④
ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教 (3) 文化を知るテキストとしての『聖書』（新約聖書）の世界1～聖書とは何か
- 第8回 ヨーロッパの精神文化⑤
ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教 (4) 文化を知るテキストとしての『聖書』（新約聖書）の世界2～聖書と西洋文化
- 第9回 ヨーロッパの精神文化⑥
ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教 (5) キリスト教と人々の生活／キリスト教文化と日本
- 第10回 ヨーロッパの精神文化⑦
ヨーロッパ三大宗教としてのキリスト教 (6) 典礼と音楽作品（カトリック、プロテスタント、英国国教会等）
- 第11回 ヨーロッパの精神文化⑧
ヨーロッパ三大宗教としてのユダヤ教 (1) ユダヤ教とは——概要と歴史
- 第12回 ヨーロッパの精神文化⑨
ヨーロッパ三大宗教としてのユダヤ教 (2) 文化を知るテキストとしての『聖書』（旧約聖書）の世界
- 第13回 ヨーロッパの精神文化⑩
ヨーロッパ三大宗教としてのユダヤ教 (3) ユダヤ教文化とヨーロッパの社会
- 第14回 ヨーロッパの精神文化⑪ヨーロッパ三大宗教としてのイスラーム (1) イスラームとは——概要と歴史
- 第15回 ヨーロッパの精神文化⑫
ヨーロッパ三大宗教としてのイスラーム (2) イスラームの文化とヨーロッパの社会
- 第16回
- 第17回
- 第18回
- 第19回
- 第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

卒業するまでのいずれかの年次で、可能な限り受講することが望ましい。

半期科目ではあるが、授業の目的・意図から言えば、内容的には後期の「西洋文化史Ⅱ」と連続して履修することを薦める。

受講予定者は初回に必ず出席のこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業で扱えることには時間的に限りがあるので、自学自習を重んじる。たとえば、普段から自分を取りまく「世界」に興味を持ち、新聞や書籍を読んだり、テレビのドキュメンタリー番組などを積極的に見たりする習慣をつけること。ネット上の情報に敏感であることも重要だが、時間をかけて作り込まれたこれらのアウトプットをじっくり読み込むことはさらに重要である。また、音楽・舞台芸術作品、美術作品、小説、映画、漫画・アニメなどを楽しむ時に、その背景に注意深く考えを巡らす習慣をつけること。それだけでも「西洋文化史」の授業外学修と言える

教科書・参考書

教科書は指定せず、テキストとなる資料をその都度配付する（各自ファイルしてきちんと管理すること）。その他は授業時に紹介する。

科目名－クラス名

西洋文化史Ⅱ

曜日時限

水 2時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	1～	後期	2	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

「西洋文化史」は、これから皆さんが音楽を専門的に学んでいくために必要となる「教養」を身につけるための科目です。ヨーロッパの人々はそのような世界観や人間観を持って、私たちがいま学んでいる音楽・芸術の伝統を生み出してきたのか…。こうした問題意識に基づいて、ヨーロッパの芸術文化を知るために不可欠な基礎知識を学びます。

とはいっても、高校までで学んできたいわゆる「世界史」の授業とは異なり、その「知識」とは個々の史実や人物名のものではありません。この授業の目的は、現代から歴史を見る、あるいは歴史から現代を見るという「視点」そのものを学ぶこと、「歴史の学び方」を学ぶことにあります。

前後期は内容的にセットになっており、前期「Ⅰ」は、西欧文化の背景（ヨコの視点）を、後期「Ⅱ」は、西欧史の流れに沿って文化の変遷（タテの視点）を扱います。

「Ⅱ」では、まず歴史を「読み解く」視点について論じます。歴史を記述するということなぜ始まったのかを考えながら、さまざまな時代・民族の「歴史についての考え方」、とりわけ、芸術の歴史に大きな影響を及ぼしたいくつかの歴史観について紹介します。皆さんが学んでいる西洋音楽史が、純粋に芸術的な欲求というよりむしろこの「歴史観」によって作られてきたものだということがわかるでしょう。続いて、ヨーロッパの古層文化について学び、ヨーロッパ文化が一言で定義できるような「一枚岩ではない」ことを学びます。

さらに後半では、ヨーロッパ世界の形成、拡大、逸脱、変質の歴史をたどりながら、自然観・人間観・世界観・芸術観の変遷を見ていきます。いずれも、音楽史で学ぶこととの背景となるものです。

そして最終的には、「Ⅰ」で学んだ現代のヨーロッパの姿がどのようにして作られてきたのか、という出発点の間に回帰していきます。

これらを通じて、歴史・文化をテキストとして読む楽しさを知ってほしいと思います。

学修成果

「西洋文化史」で学ぶのは、将来皆さんが活躍する舞台となる演奏の現場や、音楽ビジネス、音楽教育の現場で必須の知識であり、社会人として身につけているべき教養であり、これからの時代を生きていくために求められる知見です。

授業で扱ったテーマやトピックを、一朝一夕には理解できないとしても、また学生時代の間に理解できないとしても、「疑問を持ちながら生活すること」を覚えていただき、習慣として身につけてもらいます。

それによって、以下の学修効果を期待します。①音楽・舞台作品の背景や意味を深く理解することができるようになる。②「テキストとしての文化」「テキストとしての歴史」の読み方、歴史の学び方を身につけることができる。③他者・他文化への共感力を高めることができる。

授業展開と内容

第1回 導入：歴史を「読み解く」視点

なぜ歴史は記述されるのか／古今の様々な歴史観について／歴史・社会・文化を「テキスト」として学ぶことを知る／歴史を学ぶ楽しさを知る

第2回 ヨーロッパの社会と文化：古代①

ヨーロッパの古層文化とその伝統

第3回 ヨーロッパの社会と文化：古代②

古代ギリシャの世界観と「形而上学」の誕生

第4回 ヨーロッパの社会と文化：古代③

古代ローマ文化と原始キリスト教

第5回 ヨーロッパの社会と文化：中世①

中世キリスト教世界の文化／ヨーロッパにおけるキリスト教の功罪

第6回 ヨーロッパの社会と文化：中世②

「ヨーロッパの逸脱」としての十字軍／生活の中の聖と俗

第7回 ヨーロッパの社会と文化：ルネサンス①

「中世の秋」と「光のルネサンス」／ルネサンスの精神がもたらしたもの

第8回 ヨーロッパの社会と文化：ルネサンス②

「ヨーロッパの逸脱」としての大航海時代

第9回 ヨーロッパの社会と文化：ルネサンス③

「宗教改革」と「反宗教改革」がもたらしたもの

第10回 ヨーロッパの社会と文化：啓蒙思想の時代から近代へ①

啓蒙思想と新しい自然観・人間観

第11回 ヨーロッパの社会と文化：啓蒙思想の時代から近代へ②

革命の時代／ロマン主義とその背景

第12回 ヨーロッパの社会と文化：20世紀①

「世紀末」という時代／「西欧の終焉」と呼ばれた時代

第13回 ヨーロッパの社会と文化：20世紀②

「戦争の世紀」が生んだもの

第14回	ヨーロッパの社会と文化：20世紀③ 「東西を隔てる壁」が生んだもの
第15回	ヨーロッパの社会と文化：20世紀④ ヨーロッパの「外」へのまなざし／脱-中心化の思想と現代
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

卒業するまでのいずれかの年次で、可能な限り受講することが望ましい。
半期科目ではあるが、授業の目的・意図から言えば、内容的には前期の「西洋文化史Ⅰ」と連続して履修することを薦める。
受講予定者は初回に必ず出席のこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業で扱えることには時間的に限りがあるので、自学自習を重んじる。たとえば、普段から自分をとりまく「世界」に興味を持ち、新聞や書籍を読んだり、テレビのドキュメンタリー番組などを積極的に見たりする習慣をつけること。ネット上の情報に敏感であることも重要だが、時間をかけて作り込まれたこれらのアウトプットをじっくり読み込むことはさらに重要である。また、音楽・舞台芸術作品、美術作品、小説、映画、漫画・アニメなどを楽しむ時に、その背景に注意深く考えを巡らす習慣をつけること。それだけでも「西洋文化史」の授業外学修と言える

教科書・参考書

教科書は指定せず、テキストとなる資料をその都度配付する（各自ファイルしてきちんと管理すること）。
世界史の流れを理解するために、高校の世界史の教科書や参考書を座右において勉強してもよい。基本的な知識を補いつつ、教科書の記述と授業内容とを比較して「歴史へのアプローチの仕方、何が違って見えるか」がわかるのではないだろうか。

科目名－クラス名

西洋文化史 II

曜日時限

水 2時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
講義	1～	後期	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				100	0	0	0	0	

教育到達目標と概要

「西洋文化史」は、これから皆さんが音楽を専門的に学んでいくために必要となる「教養」を身につけるための科目です。ヨーロッパの人々はどのような世界観や人間観を持って、私たちがいま学んでいる音楽・芸術の伝統を生み出してきたのか…。こうした問題意識に基づいて、ヨーロッパの芸術文化を知るために不可欠な基礎知識を学びます。

とはいっても、高校までで学んできたいわゆる「世界史」の授業とは異なり、その「知識」とは個々の史実や人物名のことではありません。この授業の目的は、現代から歴史を見る、あるいは歴史から現代を見るとい

学修成果

「西洋文化史」で学ぶのは、将来皆さんが活躍する舞台となる演奏の現場や、音楽ビジネス、音楽教育の現場で必須の知識であり、社会人として身につけているべき教養であり、これからの時代を生きていくために求められる知見です。

授業で扱ったテーマやトピックを、一朝一夕には理解できないとしても、また学生時代の間に理解できないとしても、「疑問を持ちながら生活すること」を覚えていただき、習慣として身につけてもらいます。

それによって、以下の学修効果を期待します。①音楽・舞台作品の背景や意味を深く理解することができるように

授業展開と内容

- 第1回 導入：歴史を「読み解く」視点
なぜ歴史は記述されるのか／古今の様々な歴史観について／歴史・社会・文化を「テキスト」として学ぶことを知る／歴史を学ぶ楽しさを知る
- 第2回 ヨーロッパの社会と文化：古代①
ヨーロッパの古層文化とその伝統
- 第3回 ヨーロッパの社会と文化：古代②
古代ギリシャの世界観と「形而上学」の誕生
- 第4回 ヨーロッパの社会と文化：古代③
古代ローマ文化と原始キリスト教
- 第5回 ヨーロッパの社会と文化：中世①
中世キリスト教世界の文化／ヨーロッパにおけるキリスト教の功罪
- 第6回 ヨーロッパの社会と文化：中世②
「ヨーロッパの逸脱」としての十字軍／生活の中の聖と俗
- 第7回 ヨーロッパの社会と文化：ルネサンス①
「中世の秋」と「光のルネサンス」／ルネサンスの精神がもたらしたもの
- 第8回 ヨーロッパの社会と文化：ルネサンス②
「ヨーロッパの逸脱」としての大航海時代
- 第9回 ヨーロッパの社会と文化：ルネサンス③
「宗教改革」と「反宗教改革」がもたらしたもの
- 第10回 ヨーロッパの社会と文化：啓蒙思想の時代から近代へ①
啓蒙思想と新しい自然観・人間観
- 第11回 ヨーロッパの社会と文化：啓蒙思想の時代から近代へ②
革命の時代／ロマン主義とその背景
- 第12回 ヨーロッパの社会と文化：20世紀①
「世紀末」という時代／「西欧の終焉」と呼ばれた時代
- 第13回 ヨーロッパの社会と文化：20世紀②
「戦争の世紀」が生んだもの
- 第14回 ヨーロッパの社会と文化：20世紀③
「東西を隔てる壁」が生んだもの
- 第15回 ヨーロッパの社会と文化：20世紀④
ヨーロッパの「外」へのまなざし／脱-中心化の思想と現代
- 第16回
- 第17回
- 第18回
- 第19回

第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

卒業するまでのいずれかの年次で、可能な限り受講することが望ましい。
半期科目ではあるが、授業の目的・意図から言えば、内容的には前期の「西洋文化史Ⅰ」と連続して履修することを薦める。
受講予定者は初回に必ず出席のこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業で扱えることには時間的に限りがあるので、自学自習を重んじる。たとえば、普段から自分を取りまく「世界」に興味を持ち、新聞や書籍を読んだり、テレビのドキュメンタリー番組などを積極的に見たりする習慣をつけること。ネット上の情報に敏感であることも重要だが、時間をかけて作り込まれたこれらのアウトプットをじっくり読み込むことはさらに重要である。また、音楽・舞台芸術作品、美術作品、小説、映画、漫画・アニメなどを楽しむ時に、その背景に注意深く考えを巡らす習慣をつけること。それだけでも「西洋文化史」の授業外学修と言える

教科書・参考書

教科書は指定せず、テキストとなる資料をその都度配付する（各自ファイルしてきちんと管理すること）。
世界史の流れを理解するために、高校の世界史の教科書や参考書を座右において勉強してもよい。基本的な知識を補いつつ、教科書の記述と授業内容とを比較して「歴史へのアプローチの仕方、何が違って見えるか」がわかるのではないだろうか。

科目名－クラス名

音楽教養基礎

曜日時限

水 3時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	1～	前期	2	0	90	0	10	0	100

教育到達目標と概要

音楽教養コースの学びの目的は、「音楽とともに生きる」ことについて考えること。この趣旨にもとづいて、音楽とそれを取り巻く社会を知る、その「第一段階」の授業です。

この「音楽教養基礎」は、学部・短大の音楽教養コースに共通する必修の「基幹科目」です。音楽に囲まれた大学で日常生活を送るため、音楽について専門的に学ぶため、そしてやがて音楽を仕事にしようとするために、知っておかなければならない基礎的な知識を学びます。音楽教養コースの学びの第一段階として、「私たちは何を知らなければならないか」を知りましょう。そして、必要な知識や情報を得るためには、何を・どこで・どのように調べればいいのか、誰とどう話せばいいのかを知りましょう。

音楽教養コースは、いろいろな興味と動機・目的を持って音楽を学ぼうとしている人たちの集まりです。いまここにいる理由も、ここにやって来るまでの物語（ヒストリー）もそれぞれ異なります。他のどのコースとも違うこの特性を生かして、一人一人が自分の知識や経験、意見や疑問を持ち寄って、「音楽」という一つのテーマについて能動的に学ぶことの面白さを知りましょう。そして、ともに音楽を学ぶ人々のことを知りましょう。互いの話に耳を傾け、自分のことを話し、議論し、互いに違うからこそ生まれる「学びのヒント」に気づく―それを通じて、単に一人で学ぶのではなく、他者と共に互いに貢献し合いながら見識を深めていくといった学び方（現代社会で最も必要とされる学び方）を身につけていきます。

授業は、講義、グループワーク、ディスカッションなどの方法を組み合わせて行います。

学修成果

音楽の学びに必要な基礎知識を身につけることができる。音楽を学ぶための基本的な資料やツールの扱い方を知り、リサーチスキルを身に付けることができる。またグループワーク、議論やプレゼンテーションを通じて、将来社会で仕事をする際にも必要となる「学ぶ技術」「調べる技術」「考える技術」「伝える技術」を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回 導入

―「音楽教養コース」では何を学ぶ？／「音楽教養基礎」では何を学ぶ？／音楽を学ぶことで出来る仕事、音楽を学んだことが生かせる分野、現場とは？／音楽を学ぶため&音楽を仕事にするために、どんな知識やスキルが必要か？

第2回 音楽の「ジャンル」について①

―音楽にはどのようなジャンルがあるか／そもそもジャンルとは何か／各ジャンルの特徴と代表的な音楽や音楽家

第3回 音楽の「ジャンル」について②

―自分の興味のある音楽ジャンルについて調べ、語ってみよう

第4回 「楽器」について①

―世界には、歴史には、どのような楽器があるか／楽器の歴史と文化／楽器の分類法とそれが語るもの／そもそも楽器とは何か／各楽器の代表的な音楽と名手たち／ビリオド楽器と演奏

第5回 楽器について②

―自分の興味のある楽器の魅力について調べ、語ってみよう

第6回 楽譜について①

―楽譜のさまざまな形態を知ろう（スコアとは、パート譜とは、など）／楽器と楽譜との関係を知ろう／音楽ジャンルと楽譜との関係を知ろう／楽譜の歴史と変遷を知ろう／世界の楽譜文化／楽譜に依存する音楽文化と、楽譜に依存しない音楽文化について知ろう

第7回 楽譜について②

―楽譜の種類とさまざまな用語（批判校訂全集、新全集と旧全集、自筆譜、手稿譜、原典版、実用譜、校訂譜など）／さまざまな楽譜を比較する

第8回 楽譜について③

―楽譜と演奏との関係について／「即興」と「演奏習慣」という概念／「楽譜通りに演奏する」ことの、本当の意味とは

第9回 楽譜について④

―楽譜の功罪について、あるいは楽譜を読む面白さについて考え、語ってみよう

第10回 音楽事典について

―音楽事典の種類と特徴を知り、目的に応じて使い分けよう／図書館のどこにあるかを知ろう／引き方のコツや、求める情報にたどりつく方法を知ろう／音楽事典には何が書いてあるのか、何が調べられるのかを知ろう／音楽事典の記述を比較し、その違いを考えよう／事典以外の重要な書籍について知ろう／資料を整理し、記録しよう（文献表の作り方）

第11回 音楽作品について

―作品の「基本情報」とは何だろう？／「作品表」「作品目録」「作品番号」とは何だろう？／作品の名称を正確に書こう（日本語および英語での表記の仕方を覚えよう）

第12回 視聴覚資料について

視聴覚資料の種類と性格／各種の視聴覚資料の性格や取り扱い方について知ろう／視聴覚資料の「基本情報」とは何だろう？／ディスコグラフィの作り方／学びの役に立つ視聴覚資料／古今東西の名演を知ろう／演奏の比較からわかること

第13回	社会の中の音楽家 ——音楽家の義務と権利について／作者と作品の「著作権」と楽譜の「著作権」について知ろう／表現の自由について／社会における音楽家の役割／社会問題と音楽家
第14回	よい演奏会を作るには ——演奏会の種類と場所／演奏会の歴史と役割／演奏会を作る人とお金／よい演奏会に出会うために／アンテナを張って情報を集める／自分が演奏会を作るなら／演奏家の視点、プロデューサーの視点／伝えたいこと、表現したいことを考えよう／プログラムはどのように選曲し、組み立てるのだろうか？／「曲目解説」の書き方を知ろう／「演奏評」とその役割について知ろう／活動を多くの人に知ってもらうには
第15回	まとめ——学んだことについて自由に話し合い、さらに興味を広げよう
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

授業は毎回、音楽教養コースの学びに必要なことを一つずつ身につけていくように計画されているので、遅刻や欠席をしないこと。万一欠席した場合には、そのままにせず、教員からワークシートをもらい、内容を自分で補うように心がけること。授業中には、質問や意見を積極的に発言し、議論に貢献するよう努めること。最後の課題提出（レポート）に備えて、学んだことをノートにきちんと整理しておくこと。成績評価はディスカッションへの参加度、課題の実施状況とプレゼンテーション、および期末のレポートを対象として総合的に行う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業の復習と予習を兼ねた課題を出題する。各回のテーマに関連した本を読んで知識を広げよう。また下記に挙げた参考書を参考に「音楽家とキャリア」についての本を読むなどして、「音楽について学ぶ」ことの意味や、「音楽とともに生きる」ことの意味を自分なりに考えよう。これらを合わせて毎週合計120分程度を授業外学修に充てること（課題の実施等を含む）。

教科書・参考書

【教科書】特に定めない。

【参考書】

久保田慶一著『新・音楽とキャリア——音楽を通じた生き方・働き方』（スタイルノート刊）

菅野恵理子著『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる——21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』（アルテスパブリッシング刊） ほか適宜授業で紹介する

科目名－クラス名

音楽教養基礎

曜日時限

水 3時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	1～	前期	2	0	90	0	10	0	100

教育到達目標と概要

音楽教養コースの学びの目的は、「音楽とともに生きる」ことについて考えること。この趣旨にもとづいて、音楽とそれを取り巻く社会を知る、その「第一段階」の授業です。

この「音楽教養基礎」は、学部・短大の音楽教養コースに共通する必修の「基幹科目」です。音楽に囲まれた大学で日常生活を送るため、音楽について専門的に学ぶため、そしてやがて音楽を仕事にしようとするために、知っておかなければならない基礎的な知識を学びます。音楽教養コースの学びの第一段階として、「私たちは何を知らなければならないか」を知りましょう。そして、

学修成果

音楽の学びに必要な基礎知識を身につけることができる。音楽を学ぶための基本的な資料やツールの扱い方を知り、リサーチスキルを身につけることができる。またグループワーク、議論やプレゼンテーションを通じて、将来社会で仕事をする際にも必要となる「学ぶ技術」「調べる技術」「考える技術」「伝える技術」を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回 導入

――「音楽教養コース」では何を学ぶ？／「音楽教養基礎」では何を学ぶ？／音楽を学ぶことで出来る仕事、音楽を学んだことが生かせる分野、現場とは？／音楽を学ぶため＆音楽を仕事にするために、どんな知識やスキルが必要か？

第2回 音楽の「ジャンル」について①

――音楽にはどのようなジャンルがあるか／そもそもジャンルとは何か／各ジャンルの特徴と代表的な音楽や音楽家

第3回 音楽の「ジャンル」について②

――自分の興味のある音楽ジャンルについて調べ、語ってみよう

第4回 「楽器」について①

――世界には、歴史には、どのような楽器があるか／楽器の歴史と文化／楽器の分類法とそれが語るもの／そもそも楽器とは何か／各楽器の代表的な音楽と名手たち／ビリオド楽器と演奏

第5回 楽器について②

――自分の興味のある楽器の魅力について調べ、語ってみよう

第6回 楽譜について①

――楽譜のさまざまな形態を知ろう（スコアとは、パート譜とは、など）／楽器と楽譜との関係を知ろう／音楽ジャンルと楽譜との関係を知ろう／楽譜の歴史と変遷を知ろう／世界の楽譜文化／楽譜に依存する音楽文化と、楽譜に依存しない音楽文化について知ろう

第7回 楽譜について②

――楽譜の種類とさまざまな用語（批判校訂全集、新全集と旧全集、自筆譜、手稿譜、原典版、実用譜、校訂譜など）／さまざまな楽譜を比較する

第8回 楽譜について③

――楽譜と演奏との関係について／「即興」と「演奏習慣」という概念／「楽譜通りに演奏する」ことの、本当の意味とは

第9回 楽譜について④

――楽譜の功罪について、あるいは楽譜を読む面白さについて考え、語ってみよう

第10回 音楽事典について

――音楽事典の種類と特徴を知り、目的に応じて使い分けよう／図書館のどこにあるかを知ろう／引き方のコツや、求める情報にたどりつく方法を知ろう／音楽事典には何が書いてあるのか、何が調べられるのかを知ろう／音楽事典の記述を比較し、その違いを考えよう／事典以外の重要な書籍について知ろう／資料を整理し、記録しよう（文献表の作り方）

第11回 音楽作品について

――作品の「基本情報」とは何だろう？／「作品表」「作品目録」「作品番号」とは何だろう？／作品の名称を正確に書こう（日本語および英語での表記の仕方を覚えよう）

第12回 視聴覚資料について

視聴覚資料の種類と性格／各種の視聴覚資料の性格や取り扱い方について知ろう／視聴覚資料の「基本情報」とは何だろう？／ディスコグラフィの作り方／学びの役に立つ視聴覚資料／古今東西の名演を知ろう／演奏の比較からわかること

第13回 社会の中の音楽家

――音楽家の義務と権利について／作者と作品の「著作権」と楽譜の「版權」について知ろう／表現の自由について／社会における音楽家の役割／社会問題と音楽家

第14回 よい演奏会を作るには

――演奏会の種類と場所／演奏会の歴史と役割／演奏会を作る人とお金／よい演奏会に出会うために／アンテナを張って情報を集める／自分が演奏会を作るなら／演奏家の視点、プロデューサーの視点／伝えたいこと、表現したいことを考えよう／プログラムはどのように選曲し、組み立てるのだろうか？／「曲目解説」の書き方を知ろう／「演奏評」とその役割について知ろう／活動を多くの人に知ってもらうには

第15回 まとめ—学んだことについて自由に話し合い、さらに興味を広げよう

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

授業は毎回、音楽教養コースの学びに必要なことを一つずつ身につけていくように計画されているので、遅刻や欠席をしないこと。万一欠席した場合には、そのままにせず、教員からワークシートをもらい、内容を自分で補うように心がけること。授業中には、質問や意見を積極的に発言し、議論に貢献するよう努めること。最後の課題提出（レポート）に備えて、学んだことをノートにきちんと整理しておくこと。成績評価はディスカッションへの参加度、課題の実施状況とプレゼンテーション、および期末のレポートを対象として総合的に行う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業の復習と予習を兼ねた課題を出題する。各回のテーマに関連した本を読んで知識を広げよう。また下記に挙げた参考書を参考に「音楽家とキャリア」についての本を読むなどして、「音楽について学ぶ」ことの意味や、「音楽とともに生きる」ことの意味を自分なりに考えよう。これらを含めて毎週合計120分程度を授業外学修に充てること（課題の実施等を含む）。

教科書・参考書

【教科書】特に定めない。

【参考書】

久保田慶一著『新・音楽とキャリア—音楽を通じた生き方・働き方』（スタイルノート刊）

菅野恵理子著『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる—21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』（アルテスパブリッシング刊） ほか適宜授業で紹介する

科目名－クラス名

音楽教養演習Ⅰ

曜日時限

水 3時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
演習	2～	後期	1	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽教養コースの学びの目的は、「音楽とともに生きる」ことについて考えること。この趣旨にもとづいて、音楽とそれを取り巻く社会を知る、その「第二段階」の授業です。

必修科目の「音楽教養基礎」、選択科目の「音楽教養特論」で学んだ基礎知識を前提として、音楽の学びと実践の場実際に足を運びます。音楽や舞台を作っていく現場、音楽家を育てる現場、音楽を通じて地域と連携する現場、音楽を通じて人に貢献する現場で、日々何が行われているか、人がどのように動いているか、互いにどんな言葉をかけているか、表舞台の裏でどんな準備が必要なのか、客観的に観察し、考える授業です。本学の学内には、こうした気づきの場や機会があふれています。まずは各コースの教員の協力のもとに、自分の身の回りの世界を知りましょう。

見学の日程は、初回の授業で発表します。決まった授業時間以外の曜日や時間帯に不規則に見学が入るので、教員やティーチングアシスタント、クラスメートとの連絡を密に取る必要があります。このスケジュール調整や相互連絡を通じて、社会人として必要な「報告・連絡・相談」の習慣を身に付けるのも、この授業の目的の一つです。

いっぽう、音楽教養コースでの二年目の学びの総括として、「経験したことを次に生かす」ことを学びます。自分の学びのストーリー（物語）振り返り、「私だからこぞできることは何か」という視点を持つこと、他者と率直に意見を交わして新しい気づきを得ること、他者と体験を共有することの重要性を学びます。また、自分が学んだこと・習得したことを段階的に正しく自己評価することが「次への一歩」につながることを学びます。

学修成果

関心のある分野について、自分の言葉で語ったり、文章で表現したりすることができるようになる。アクティヴ・ラーニングを通じて、客観的な観察力と思考力を養い、問題発見能力・課題解決能力を身につけることができる。またクラスメートとのディスカッションや、教員との連絡のやり取りを通じて、コミュニケーション能力を高めることができる。

授業展開と内容

第1回 導入（有田）

音楽の世界を知るための学びとは／見学日程の発表とワークシートの配付／見学を通じて何を学ぶか／見学についての注意事項／「報告・連絡・相談」の基本、誤解や間違いを防ぐためのコミュニケーションのコツを知る

第2回 研究テーマの探し方・選び方①（有田）

身近な興味や疑問を「研究」にする／演奏&プレゼンテーションに向いている研究テーマとは

第3回 研究テーマの探し方・選び方②（有田）

身近な興味や疑問を専門的な視点で深める／論文&プレゼンテーションに向いている研究テーマとは

第4回 調べる方法を知る（有田）

研究に必要な資料を集める方法／興味を広げる方法／人から学ぶ方法／研究をサポートしてくれる人を知る／話の聴き方・質問の仕方・アポイントメントの取り方

第5回 「ポピュラー、ジャズの楽しみ」についての実践的な学び（白船陸洋）※授業スケジュール変更の可能性あり

第6回 「オペラの舞台ができるまで」についての実践的な学び（鈴木とも恵、山館冬樹）※授業スケジュール変更の可能性あり

第7回 「オーケストラの楽しみ」についての実践的な学び（加藤明久）※授業スケジュール変更の可能性あり

第8回 「吹奏楽の楽しみ」についての実践的な学び（加藤明久）※授業スケジュール変更の可能性あり

第9回 「バレエの舞台ができるまで」についての実践的な学び（小山久美）※授業スケジュール変更の可能性あり

第10回 「ミュージカルの舞台ができるまで」についての実践的な学び（有田+ミュージカル担当特別講師）※授業スケジュール変更の可能性あり

第11回 「音楽療法」についての実践的な学び（白川ゆう子）※授業スケジュール変更の可能性あり

第12回 「アートマネジメント」についての実践的な学び（酒井健太郎）※授業スケジュール変更の可能性あり

第13回 「作曲家の仕事とは何か」についての実践的な学び（豊住竜志）※授業スケジュール変更の可能性あり

第14回 学んだことの発表と、ディスカッション（有田）

～見学で学んだ成果を自己評価する／「〇〇私だからこぞ気づいたこと」は何か／自分の視点を持って音楽の世界を見る／「他者の視点」に学ぶ／自分の興味あることを見つける

第15回 発表の講評、まとめと考察、そして3年次に向けての準備について（有田）

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

- ◆見学の回は通常授業コマとは異なる日・時間・場所で開催されることがあるので注意すること。
- ◆見学日程によって、授業回の順番は変わる場合がある。
- ◆初回の授業では授業の趣旨説明やガイダンスを行うので、必ず出席すること。
- ◆ワークシートを完成させ、レポートとして提出すること。成績評価は主としてこのレポートの内容にもとづいて行う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

各見学の内容を、その都度授業外の時間を使ってきちんと提出用ワークシートにまとめておくこと。また授業内で触れた様々な分野の現場に興味を持ったら、それについてより深く知ろうと努力すること。必要に応じて、本授業の担当教員に質問したり、学習サポートを申し込むことができる。これらを含めて毎週合計60分程度を授業外学修に充てること。

教科書・参考書

【教科書】特に定めない。

【参考書】

久保田慶一著『新・音楽とキャリアー—音楽を通じた生き方・働き方』（スタイルノート刊）

菅野恵理子著『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる—21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』（アルテスパブリッシング刊） ほか適宜授業で紹介する

科目名－クラス名

音楽教養演習Ⅰ

曜日時限

水 3時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
演習	2～	後期	1	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽教養コースの学びの目的は、「音楽とともに生きる」ことについて考えること。この趣旨にもとづいて、音楽とそれを取り巻く社会を知る、その「第二段階」の授業です。

「音楽教養演習Ⅰ」は、学部の音楽教養コース必修の「基幹科目」です。「音楽教養基礎」「音楽教養特論」で学んだ基礎知識を前提として、音楽の学びと実践の場実際に足を運びます。音楽や舞台を作って行く現場、音楽家を育てる現場、音楽を通じて地域と連携する現場、音楽を通じて人に貢献する現場で、日々何が行われているか、人がどのように動いているか、互いにどんな言

学修成果

関心のある分野について、自分の言葉で語ったり、文章で表現したりすることができるようになる。アクティヴ・ラーニングを通じて、客観的な観察力と思考力を養い、問題発見能力・課題解決能力を身につけることができる。またクラスメートとのディスカッションや、教員との連絡のやり取りを通じて、コミュニケーション能力を高めることができる。

授業展開と内容

- 第1回 導入 (有田)
音楽の世界を知るための学びとは／見学日程の発表とワークシートの配付／見学を通じて何を学ぶか／見学についての注意事項／「報告・連絡・相談」の基本、誤解や間違いを防ぐためのコミュニケーションのコツを知る
- 第2回 研究テーマの探し方・選び方① (有田)
身近な興味や疑問を「研究」にする／演奏&プレゼンテーションに向いている研究テーマとは
- 第3回 研究テーマの探し方・選び方② (有田)
身近な興味や疑問を専門的な視点で深める／論文&プレゼンテーションに向いている研究テーマとは
- 第4回 調べる方法を知る (有田)
研究に必要な資料を集める方法／興味を広げる方法／人から学ぶ方法／研究をサポートしてくれる人を知る／話の聴き方・質問の仕方・アポイントメントの取り方
- 第5回 「ポピュラー、ジャズの楽しみ」についての実践的な学び (白船陸洋) ※授業スケジュール変更の可能性あり
- 第6回 「オペラの舞台ができるまで」についての実践的な学び (鈴木とも恵、山館冬樹) ※授業スケジュール変更の可能性あり
- 第7回 「オーケストラの楽しみ」についての実践的な学び (加藤明久) ※授業スケジュール変更の可能性あり
- 第8回 「吹奏楽の楽しみ」についての実践的な学び (加藤明久) ※授業スケジュール変更の可能性あり
- 第9回 「バレエの舞台ができるまで」についての実践的な学び (小山久美) ※授業スケジュール変更の可能性あり
- 第10回 「ミュージカルの舞台ができるまで」についての実践的な学び (有田+ミュージカル担当特別講師) ※授業スケジュール変更の可能性あり
- 第11回 「音楽療法」についての実践的な学び (音楽療法担当教員) ※授業スケジュール変更の可能性あり
- 第12回 「アートマネジメント」についての実践的な学び (酒井健太郎) ※授業スケジュール変更の可能性あり
- 第13回 「作曲家の仕事とは何か」についての実践的な学び (豊住竜志) ※授業スケジュール変更の可能性あり
- 第14回 学んだことの発表と、ディスカッション (有田)
～見学で学んだ成果を自己評価する／「〇〇な私だからこそ気づいたこと」は何か／自分の視点を持って音楽の世界を見る／「他者の視点」に学ぶ／自分の興味あることを見つける
- 第15回 発表の講評、まとめと考察、そして3年次に向けての準備について (有田)
- 第16回
- 第17回
- 第18回
- 第19回
- 第20回
- 第21回
- 第22回
- 第23回
- 第24回
- 第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

- ◆見学の回は通常授業コマとは異なる日・時間・場所で開催されることがあるので注意すること。
- ◆見学日程によって、授業回の順番は変わる場合がある。
- ◆初回の授業では授業の趣旨説明やガイダンスを行うので、必ず出席すること。
- ◆ワークシートを完成させ、レポートとして提出すること。成績評価は主としてこのレポートの内容にもとづいて行う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

各見学の内容を、その都度授業外の時間を使ってきちんと提出用ワークシートにまとめておくこと。また授業内で触れた様々な分野の現場に興味を持ったら、それについてより深く知ろうと努力すること。必要に応じて、本授業の担当教員に質問したり、学習サポートを申し込むことができる。これらを含めて毎週合計60分程度を授業外学修に充てること。

教科書・参考書

【教科書】特に定めない。

【参考書】

久保田慶一著『新・音楽とキャリアー—音楽を通じた生き方・働き方』（スタイルノート刊）

菅野恵理子著『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる—21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』（アルテスパブリッシング刊） ほか適宜授業で紹介する

科目名－クラス名

音楽教養演習Ⅱ

曜日時限

水 5時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	3～	通年	2	0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

音楽教養コースの学びの目的は、「音楽とともに生きる」ことについて考えること。この趣旨にもとづいて、音楽とそれを取り巻く社会を知る、その「第三段階」の授業です。

「音楽教養演習Ⅱ」は、学部の音楽教養コース三年次必修の「基幹科目」です。音楽の世界について「知る」ことを目的とした「音楽教養基礎」「音楽教養演習Ⅰ」に引き続き、音楽と社会、あるいは芸術と社会との関りについてより深く「考える」ことを通じて、自身の研究テーマを探求することを目的としています。授業では、段階的にさまざまな課題を課し、音楽研究の基本的な手法や手順についても具体的かつ能動的（アクティブ）に学んでいきます。

前期は、ディスカッションや人前でのプレゼンテーションに慣れることを目標にしています。複数の課題文を与え、「多様な立場や意見を整理する」練習、「問いを見出す」練習、「議論を展開する」練習を行いながら、自分の意見を組み立てたり、整理したりすることを助けるツールなども紹介します。またディスカッションの中で「自分に適した役割を見つける」ことを覚え、議論やグループワークへの貢献の仕方を学びます。

引き続き後期にかけても、課題文を読みながら、「議論を深める」練習、「議論を収斂させ、そこから一步踏み込んだ何かを見出す」練習を行います。これに加えて、「インタビューを行い、記事をまとめる」練習、音楽エッセイ（時評、評論）を書く練習、曲目解説を書く練習など、「文章を書く」練習を根気よく行うとともに、「他者の文章や成果発表を適切に評価する」練習、「他者の意見や気付きを効果的に生かす」練習も行います。また、著作権や研究倫理に関しても基本的なルールを学び、卒業研究にむけて「研究力」を養っていきます。

これらを通じて、自分自身の興味や特性を見極め、卒業研究に何をしたいか、何ができるか、ヴィジョンを描いて「最初の研究計画」を作ることを到達目標とします。

学修成果

- ◆ディスカッションの基本的な手法を身につけ、臆せず議論に貢献できるようになる。
- ◆効果的な口頭プレゼンテーションの手法を身につけ、人前で臆せず考えを述べられるようになる。
- ◆目的に応じた的確な文章表現ができるようになる。
- ◆他者とのコミュニケーションを通じて学ぶこと、協働して学ぶことができるようになり、社会人基礎力を高めることができる。
- ◆研究テーマや研究手法についての知識・理解を深め、論理的思考ができるようになる。
- ◆研究倫理や著作権に配慮した学修・活動ができるようになる。

授業展開と内容

第1回 導入

「研究力」とはなんだろう／ディスカッションとプレゼンテーション、その目的とは

第2回 プレゼンテーション・口頭発表に慣れる／プレゼンテーションのためのツールを知る

第3回 ディスカッションの手法を学ぶ①

ディスカッションの意識改革／ディスカッションのためのツールを知る

第4回 ディスカッションの手法を学ぶ②（以下、数個のテーマや課題文をもとに展開する）

課題文を読み、内容を整理する／感想を述べることと論じることの違いを知る

第5回 ディスカッションの手法を学ぶ③

さまざまな問いを立て、議論を拡散させる

第6回 ディスカッションの手法を学ぶ④

他者の問いや答えを受けて、新たな問いを立てる

第7回 ディスカッションの手法を学ぶ⑤

拡散した議論を収束させる

第8回 ディスカッションの手法を学ぶ⑥

「もう一步」踏み込む読み方／「そこから何を学ぶことができるか」という視点

第9回 ディスカッションの手法を学ぶ⑦

議論の中での自分の役割（コントリビューション）を見つける／役割を果たす

第10回 ディスカッションの手法を学ぶ⑧

グループ同士、議論の経緯と成果を発表し、評価する

第11回 考えるため・調べるためのツールと方法を知る①

資料の整理方法を学ぶ／資料を「評価」する

第12回 考えるため・調べるためのツールと方法を知る②

人から情報を得る手法としてのインタビュー／インタビューの作法

第13回 考えるため・調べるためのツールと方法を知る③

インタビューを記録する／インタビュー記事を書く／研究に生きるインタビューとは

第14回 研究倫理と著作権

第15回 前期のまとめと夏休みの課題、後期に向けての準備について／各自の研究の準備を開始する

第16回 夏休みの成果報告と後期の導入

第17回 調べたこと、考えたことを文章にする①
音楽エッセイを読む／音楽エッセイを書く

第18回 調べたこと、考えたことを文章にする②
言いたいことを整理して推敲する／読みやすい文、人を惹きつける文を書く／文体から書き手の個性を読みとる

第19回 調べたこと、考えたことを文章にする③
曲目解説を読む／曲目解説を書いてみる

第20回 調べたこと、考えたことを文章にする④
目的や対象によって文章を書き分ける／正確な情報を確認する手間をかける

第21回 調べたこと、考えたことを文章にする⑤
演奏評を読む／演奏評を書いてみる

第22回 調べたこと、考えたことを文章にする⑥
ジャーナリスティックな文章の書き方・読み方を知る

第23回 調べたこと、考えたことを文章にする⑦
互いの文章を添削し、評価する／良い文章とは何か、よい書き手とは何か

第24回 卒業研究への準備①
卒業研究にむけてのガイダンス／ブレインストーミング

第25回 卒業研究への準備②
研究テーマについてアイデアを拡散させる

第26回 卒業研究への準備③
研究テーマについてアイデアを収斂させる／「一歩踏み込む」とはどういうことか

第27回 卒業研究への準備④
研究計画を書く／できること、やってみたいことを整理して、具体的なスケジュールを立てる

第28回 卒業研究への準備⑤
資料のリストアップと参考文献表・参考資料リストの作成

第29回 卒業研究への準備⑥
研究計画のプレゼンテーションと推敲

第30回 一年間のまとめと、卒業研究に向けた課題

履修上の注意

- ◆この授業では、各自が課題を実施することと、ディスカッションやプレゼンテーションを行うこと、どちらも等しく重要です。しかしディスカッションやプレゼンテーションは、社会人として重視される能力であるにも関わらず、苦手意識を持つ人もいます。この授業では、一年を通じてそうした苦手意識を払しょくし、むしろ「得意」になるために、段階を踏んで練習していきますので、授業には休まず参加してください。
- ◆授業内容・順番は、履修者の興味や特性に応じて変更することがあります。
- ◆成績評価は、課題実施の状況、プレゼンテーションの内容、授業内でのディスカッションへの参加度・貢献度、および期末のレポートなどを総合して行います。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

ほとんど毎回「読んでくる」「調べてくる」「書いてくる」という課題が出題されます。これらは、次回の授業を実りあるものにするために不可欠な授業外学修です。授業外に教員に質問したり、学修サポートを受けたりすることもできるので、活用してください。これらを含めて毎週合計60分程度を授業外学修に充てること。

教科書・参考書

教科書は特に指定しない。授業の内容に応じて、必要となる資料を用意するので、各自ファイリングすること。

参考書：佐藤望 ほか著『アカデミック・スキルズ―大学生のための知的技法入門』（第3版）慶應義塾大学出版会刊

科目名－クラス名

音楽教養演習Ⅲ

曜日時限

担当教員

水 4時限

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	4～	通年	2	0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

音楽教養コースの学びの目的は、「音楽とともに生きる」ことについて考えること。この趣旨にもとづいて、音楽とそれを取り巻く社会を知る、その「第四段階」にして学びの総括となる授業です。

「音楽教養演習Ⅲ」は、学部音楽教養コース四年次必修の「基幹科目」です。音楽の世界について「知る」ことを目的とした「音楽教養基礎」「音楽教養演習Ⅰ」、そして音楽・芸術と社会との関りについてより深く「考える」ことを目的とした「音楽教養演習Ⅱ」で学んだことの集大成として、自分が社会の中で果たす役割（ミッション）とは何か、それを探し、考えることを目的としています。同時に、社会に出てからの仕事や、より高度な学修に通用するさまざまなスキルを磨いていきます。

社会に出る一歩手前の段階として、音楽人の視点だけでなく、社会人としての視点から、音楽と社会とのかかわりをもう一度見直してみましょう。授業では、音楽をとりまくさまざまな社会的トピックをテーマや課題として与え、主体的な個人ワークやグループワーク、活発なディスカッションを通じて、つねに問題意識を持つこと、探求心を持って問いを掘り下げること、先入観にとらわれることなく表層的な事象の向こうにある本質的な問題を見と出すことを学びます。そして最終的には、各自が現代社会の中の音楽文化についての幅広い識見を持ち、それぞれの道で社会に貢献できる人材として成長することを目的としています。

学修成果

- ◆主体的な課題発見能力、課題解決能力を身に付けることができる。
- ◆現代の音楽文化についての幅広い知識と識見を持ち、自身の意見を明確に述べるようになる。
- ◆社会人として、現代社会の問題や課題を一步踏み込んで考える習慣を身に付けることができる。
- ◆他者と円滑なコミュニケーションを築きながら学び、協働することができるようになり、社会人を高めることができる。
- ◆ディスカッションの手法を理解し、効果的で創造的な議論を展開することができるようになる。
- ◆パブリック・スピーキングとは何かを理解し、効果的なプレゼンテーションができるようになる。

授業展開と内容

第1回 自分のプレゼンスをデザインする
プロフィールを書く／履歴書を書く／武器になるポートフォリオを作る／PDCAとデザイン思考／「評価する」文化に慣れる

第2回 仮想の演奏会から学ぶ①
仮想の演奏会または音楽番組を想定して考える／魅力的な演奏会や番組を作るために必要なことは／選曲・構成を考える

第3回 仮想の演奏会から学ぶ②
情報を伝える方法／リリースとチラシ／プログラム冊子はどう作るか／細部への配慮の大切さ

第4回 仮想の演奏会から学ぶ③
演奏会を作る人とお金

第5回 仮想の演奏会から学ぶ④
1分で音楽を紹介する／1分で演奏家を紹介する／「わかりやすさ」の功罪

第6回 仮想の演奏会から学ぶ④
音楽を引き立てる「お話し」をする／パブリック・スピーキングについて

第7回 音楽の世界を知る①
現代音楽をめぐる状況 [担当教員または特別講師を予定]

第8回 グループワークとディスカッション
テーマ例…芸術とポピュラリティ

第9回 音楽の世界を知る②
「古楽」あるいはピリオド演奏をめぐる状況 [担当教員または特別講師を予定]

第10回 グループワークとディスカッション
テーマ例…企画力と発信力

第11回 音楽の世界を知る③
劇場・ホールをめぐる状況 [担当教員または特別講師を予定]

第12回 グループワークとディスカッション
テーマ例…人を動かし、サポートを得る

第13回 音楽の世界を知る④
オーケストラをめぐる状況 [担当教員または特別講師を予定]

第14回 グループワークとディスカッション
テーマ例…芸術家のミッション

第15回 音楽の世界を知る⑤

マスメディアをめぐる状況 [担当教員または特別講師を予定]

第16回	グループワークとディスカッション テーマ例…表現の自由
第17回	音楽の世界を知る⑥ 伝える現場——報道、放送、出版 [担当教員または特別講師を予定]
第18回	グループワークとディスカッション テーマ例…「コンプライアンス」と「ポリティカル・コレクトネス」
第19回	音楽の世界を知る⑥ 学術研究をめぐる状況 [担当教員または特別講師を予定]
第20回	グループワークとディスカッション テーマ例…ことばの力、ペンの力
第21回	音楽の世界を知る⑦ 音楽に関わる事業やビジネス [担当教員または特別講師を予定]
第22回	グループワークとディスカッション テーマ例…グローバル化と文化の観光化
第23回	音楽の世界を知る⑧ 伝統音楽をめぐる状況 [担当教員または特別講師を予定]
第24回	グループワークとディスカッション テーマ例…「伝統」の創出
第25回	音楽の世界を知る⑨ 地域の音楽活動をめぐる状況 [担当教員または特別講師を予定]
第26回	グループワークとディスカッション テーマ例…音楽による社会貢献とは／音楽を生み育てる「場」の変遷
第27回	音楽の世界を知る⑩ 音楽の公教育と私教育——音楽大学が果たす役割とは何か [担当教員または特別講師を予定]
第28回	グループワークとディスカッション テーマ例…真のアマチュアリズムとは／次世代に向けて伝えるべきこと
第29回	グループワークとディスカッション テーマ例…社会の問題や課題を、一歩踏み込んで考える
第30回	総括 「ディプロマ・ポリシー」に照らして、自身の学びを振り返る

履修上の注意

- ◆授業内容・順番は、履修者の興味や特性、また特別講師の都合に応じて変更することがある。
- ◆成績評価は、期末のレポート、および授業内でのグループワークやディスカッションへの参加度・貢献度などを総合して行う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業への準備として、「読んでくる」「調べてくる」という課題が定期的に出題される。これらは、授業を実りあるものにするために不可欠な授業外学修である。授業外に教員に質問したり、学修サポートを受けたりすることもできるので、活用してほしい。これらを合わせて毎週合計60分程度を授業外学修に充てること。

教科書・参考書

【教科書】教科書は特に指定しない。授業の内容に応じて、必要となる資料を用意するので、各自ファイリングすること。他の参考文献などはその都度紹介する。

【参考書】

- ①佐藤望 ほか著『アカデミック・スキルズ——大学生のための知的技法入門』（第3版）慶應義塾大学出版会刊
- ②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門——人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊 ほか

科目名－クラス名

卒業研究

音楽教養

曜日時限

木 3時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
演習	4～	通年	2	評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト
				評価割合	0	50	0	50	0

教育到達目標と概要

音楽教養コースでの4年間の学びの集大成として、各自が研究成果をまとめ、発表する。研究成果発表の形式は、以下のAまたはBどちらかを選択する。

A：演奏 + 小論 + 口頭発表

B：論文 + 口頭発表

論文または小論を執筆することにより、論理的な思考を組み立てるスキルや、考えを文章にまとめるスキルを身につけるとともに、口頭発表によりプレゼンテーション・スキルを磨く。

授業では、①テーマを決める、②手順を考え、ロードマップを作成する、③必要な情報をリサーチする、④文章を書く、⑤プレゼンテーションの資料を作成する、⑥リハーサルとフィードバックを行い発表の準備をする、⑦発表を行い、講評を受ける、という一連の手順を踏み、それを通じて課題発見能力・課題解決能力を養っていく。

授業の形態は、基本的に合同のクラス授業であるが、うち3回分に相当する時間は個別指導となる。すなわち演奏を主とする者（上記A）は、実技について45分×6回＝合計270分の特別個人レッスンを受けることができ、また論文を主とする者（上記B）についても、90分×3回または45分×6回＝合計270分の論文個人指導を受けることができる。

このほかの部分では、基本的に授業外に各自で研究を進め、授業ではグループワークにより論文・小論の添削を行ったり、ローテーションを組んで発表を行い、教員の指導を受けたりする。これにより推敲や論文指導の技術そのものも学ぶ。また前期の終わりと後期の初めには、中間発表や進捗状況の報告を行う。

学修成果

- ◆主体的な課題発見能力、課題解決能力を身につけることができる。
- ◆論文または小論の執筆を通じて、音楽に対する専門的な知識・理解を深め、論理的思考と的確な文章表現ができるようになる。また、専門的な文章に相応しい書式を覚えることができる。
- ◆論文執筆を通じて、学術的研究に必要な基本的なリサーチ・スキルを習得することができる。
- ◆演奏発表を通じて、実践的な音楽理解を深め、表現能力を高めることができる。
- ◆口頭発表を通じて、プレゼンテーション・スキルを習得することができる。
- ◆成果発表会の準備を通じて、計画力・行動力を養い、社会人として必要なコミュニケーション・スキルを習得することができる。

授業展開と内容

- 第1回 卒業研究ガイダンス①
担当教員とスケジュールの確認／執筆をサポートする体制の確認
- 第2回 卒業研究ガイダンス②
テーマを決め、研究計画を作成する／ロードマップを作る
- 第3回 論文・小論の書き方を学ぶ①
研究倫理と著作権について確認する／チェックポイントと必要な手続きを知る
- 第4回 論文・小論の書き方を学ぶ②
資料をあつめ、リストアップする／文献表・資料一覧を作る／「先行研究」という概念とその重要性について
- 第5回 論文・小論の書き方を学ぶ③
論文や専門的な文章に相応しい書式を学ぶ
- 第6回 論文・小論の書き方を学ぶ④
論文の章立てを考える／小論の構成を考える
- 第7回 論文・小論の書き方を学ぶ⑤
論文の目的・対象・方法を定める／小論の中で書きたいこと・伝えたいことを絞る
- 第8回 論文・小論の書き方を学ぶ⑥
論文の「設計図」としての序論の書き方について／小論の導入となる部分の書き方について
- 第9回 論文・小論の書き方を学ぶ⑦
グループで添削・推敲し合い、教員の指導を受ける
- 第10回 論文・小論の書き方を学ぶ⑧
執筆を進め、途中経過を発表する
- 第11回 論文・小論の書き方を学ぶ⑨
さまざまな引用の方法を学ぶ／「引用に語らせる」ことを避ける方法／注の役割について／効果的な注の付け方を学ぶ
- 第12回 論文・小論の書き方を学ぶ⑩
論文各章の書き出しと、小括の方法について／段落の付け方について
- 第13回 論文・小論の書き方を学ぶ⑪
図表の効果的な使い方について／「図表に語らせる」ことを避ける方法

第14回	論文・小論の書き方を学ぶ⑫ グループで添削・推敲し合い、教員の指導を受ける
第15回	中間発表 発表の仕方を学ぶ
第16回	進捗状況報告 夏期休暇中の成果を振り返り、ロードマップを見直す
第17回	論文・小論の書き方を学ぶ⑬ 執筆を進め、グループで添削・推敲し合い、教員の指導を受ける
第18回	論文・小論の書き方を学ぶ⑭ 論文の結論の書き方について／小論の結び方について
第19回	論文・小論の書き方を学ぶ⑮ 論文・小論の全体を整え、論旨が通っているかを確認する／書式の統一／目次・凡例・謝辞などの書き方
第20回	実技または論文の個別指導① [担当教員または特別講師] ※別途スケジュールを組む。出席票を持参のこと 研究のクオリティを上げるために
第21回	実技または論文の個別指導② [担当教員または特別講師] ※別途スケジュールを組む。出席票を持参のこと 発表に向けての仕上げ
第22回	実技または論文の個別指導③ [担当教員または特別講師] ※別途スケジュールを組む。出席票を持参のこと 各自の成果にもとづくカウンセリング
第23回	提出に向けてのガイダンス 研究倫理は守られているか／著作権は守られているか／研究協力者へのマナーを知る
第24回	発表に向けての準備を整える① 発表の手順、使用する楽器・機材、ハンドアウトの有無等を打ち合わせる
第25回	発表に向けての準備を整える② 発表資料・スライド、ハンドアウトを完成させる
第26回	発表に向けての準備を整える③ 演奏と口頭発表のリハーサル、フィードバック ※リハーサルの実施日時は別途調整する。通常授業コマ以外の日時で実施する場合がある。
第27回	発表に向けての準備を整える④ 演奏と口頭発表のリハーサルと再調整、フィードバック ※リハーサルの実施日時は別途調整する。通常授業コマ以外の日時で実施する場合がある。
第28回	成果発表会① 演奏発表 ※発表会の日時は別途調整する。通常授業コマ以外の日時で実施する場合がある。
第29回	成果発表会② 論文発表 ※発表会の日時は別途調整する。通常授業コマ以外の日時で実施する場合がある。
第30回	講評とフィードバック、および総括

履修上の注意

- ◆演奏を中心とする研究か、論文を中心とする研究かは、学生自身が選択できるが、その実現可能性も含めて教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
- ◆演奏を選択する場合、学生が主専攻あるいは副科で選択しているもの（楽器あるいは声楽）に限る。
- ◆研究に当たっては研究倫理に留意し、各種規程を遵守すること。インタビュー、アンケート、実験等の「人を対象とする研究」に相当する場合、あらかじめ大学の「研究倫理委員会」への申請が必要となるので、早急に授業担当教員に相談すること。
- ◆成績評価は、成果物としての論文・演奏・小論と、プレゼンテーション（口頭発表・配付物）の内容、および授業内での課題の取り組み方を総合して行う。
- ◆個別指導の際には、各自の出席票を持参し、教員のサインまたは印を貰うこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業での指導に基づいて、各自が自主的に研究を進める。演奏実技への取り組み、論文・小論の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、とりわけ授業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、練習時間・執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。

教科書・参考書

- 各自の研究内容に応じて、必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献・資料は各自が入手すること。
論文・小論の執筆マニュアルは授業内で配付・指導するが、以下の参考書も参照するとよい。
- ①市古ひとり ほか著『資料検索入門—レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊
 - ②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門—人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊
 - ③久保田慶一著『音楽の文章セミナー—プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊
 - ④R. J. ウィンジェル著『音楽の

科目名－クラス名

課題研究Ⅰ

曜日時限

木 2時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
演習	2～	通年	2	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

- ◆修士課程における学修の総括として、修士論文（20,000～30,000字程度）を執筆する。
- ◆修士論文では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいて、先行研究を正しく評価・参照しながら、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により学術的な議論を深め、展開していくことが求められる。したがって、それに耐えうるテーマ・題材を設定することが必要である。
- ◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、学術論文の基本的な書き方、および論文作成に必要なリサーチ・スキルを修得すること

学修成果

論文執筆の過程を通じて、学術論文の執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
論文執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

授業展開と内容

- 第1回 執筆計画の策定と論文タイトルの決定① 修士論文題目の提出に向けた指導
- 第2回 執筆計画の策定と論文タイトルの決定② 修士論文執筆計画書の提出に向けた指導
- 第3回 論文執筆の予備的作業① 文献表の完成と基礎知識の整理
- 第4回 論文執筆の予備的作業② 文献・資料の選定
- 第5回 論文執筆の予備的作業③ 論文の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査の要・不要の確認
★「履修上の注意」を参照のこと
- 第6回 論文執筆① 序論の書き方
- 第7回 論文執筆② 序論の執筆
- 第8回 (以下、3章立ての論文を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。4章立ての場合もこれに準じて計画する)
論文執筆③ 第1章のための文献を読む
- 第9回 論文執筆④ 第1章の執筆
- 第10回 論文執筆⑤ 第1章の推敲
- 第11回 論文執筆⑥ 第2章のための文献を読む
- 第12回 論文執筆⑦ 第2章の執筆
- 第13回 論文執筆⑧ 第2章の推敲
- 第14回 中間発表の準備① 中間発表にむけて、発表原稿作成
- 第15回 1. 中間発表の準備② 中間発表のハンドアウト作成、プレゼンテーションの練習 2. 夏休み中の作業計画確認
★修士論文中間レポートを指導担当の教員に提出（字数自由。期日・様式は各担当教員の指示に従うこと）
- 第16回 中間発表のレビュー／執筆進捗状況の報告／後期の執筆計画の確認
- 第17回 論文執筆⑨ 第3章のための文献や資料を整理する
- 第18回 論文執筆⑩ 第3章の執筆
- 第19回 論文執筆⑪ 第3章の推敲
- 第20回 論文執筆⑫ その他の部分の執筆と推敲
- 第21回 論文執筆⑬ 結論の書き方
- 第22回 論文執筆⑭ 結論の執筆と推敲
- 第23回 論文執筆⑮ 序論と結論、および全体の論旨の確認と見直し
- 第24回 論文執筆⑯ 参考文献表を整える
- 第25回 論文執筆⑰ 書式を整える（注の書式、参考文献表の書式、諸例や図版のキャプション等の確認）
- 第26回 論文執筆⑱ 体裁を整える（本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）
- 第27回 論文執筆⑲ 論文要旨を執筆する
- 第28回 提出前の最終確認 論文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

第29回 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業① 口頭試問で指摘を受けた事項の確認、および誤字脱字・書式の確認

第30回 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業① 本文と要旨およびその他提出物の再確認

履修上の注意

- ◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
- ◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
- ◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
- ◆修士論文を執筆する年度当初に「修士論文執筆計画書」の提出、「修士論文題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
- ◆論文の執筆に当たっては研究倫理に留意し

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
- ◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
 - ①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
 - ②「研究倫理ガイダンス」への参加
 - ③口頭試問で指摘を受けた事項の修正・確認（試問終了後、担

教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門——レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門——人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー——プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文

科目名－クラス名

西洋音楽史特殊講義

曜日時限

火 3時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
講義	1～	前期	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				100	0	0	0	0	

教育到達目標と概要

音楽を専門的に学ぶ者にとって、西洋音楽史に関する理解は必要不可欠なものであり、とりわけ高度な学びの場である大学院においては、より確実で整理された知識が求められる。本授業では西洋音楽史の流れを、文化的・社会的背景と具体的な作品とともに振り返りながら、それぞれの時代に特徴的な音楽を楽しむと同時に、歴史的に系統立てて把握する力を強化することを目標とする。

学修成果

- ①音楽が生まれた時代背景と様式の変遷について、明確に理解し説明できるようになる。
- ②様々な特徴を持つ音楽について、歴史的視点から体系的に考察できるようになる。

授業展開と内容

- 第1回 導入：西洋音楽史を学ぶ意義とは&ブレイスメント試験（王&石川クラスを除く）
- 第2回 中世の社会と音楽
- 第3回 ルネサンスの社会と音楽
- 第4回 バロックの社会と音楽①：絶対主義と貴族社会
- 第5回 バロックの社会と音楽②：オペラの誕生と展開
- 第6回 バロックの社会と音楽③：コンチェルト、ソナタ
- 第7回 古典派の社会と音楽①：啓蒙思想とソナタ形式
- 第8回 古典派の社会と音楽②：交響曲、弦楽四重奏曲、ソナタ
- 第9回 古典派の社会と音楽③：グルックのオペラ改革とモーツァルト
- 第10回 ソナタロマン派の社会と音楽①：フランス革命と市民社会
- 第11回 ロマン派の社会と音楽②：オーケストラ、ピアノ
- 第12回 ロマン派の社会と音楽③：オペラ、歌曲
- 第13回 近現代の社会と音楽①：ドビュッシー、ストラヴィンスキーとシェーンベルク
- 第14回 近現代の社会と音楽②：前衛主義と実験主義
- 第15回 総括：再び、西洋音楽史を学ぶ意義とは

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

2019年度入学者から、両専攻とも必修科目となるので注意すること。留学生は王&石川クラスを履修すること。留学生以外の履修者については、第1回の授業内でブレイスメント試験を実施し、結果に従ってクラス指定を行う。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内で鑑賞できる作品や部分は限られているので、図書館などを活用し、各自で楽譜および音源や映像資料を入手して、積極的に様々な音楽に触れていくこと（60分）。その際、授業の内容をよく復習し、アカデミックに音楽と向き合う態度を心がけて欲しい。

■ 教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、適宜、授業内でプリントを配付するので、各自で管理すること。

参考書：M. カッロツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）。その他、授業内でも紹介する。

科目名－クラス名

音楽研究法基礎

曜日時限

火 3時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
講義	1～	後期	1	評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト
				評価割合	40	30	0	30	0
									100

教育到達目標と概要

大学院修士課程の基幹科目の一つとして、音楽を専門的かつ学術的に研究するための基本的手法を学ぶ。実質的には修士論文・修士研究執筆に備えることを目的とするが、大学院生として、また音楽実践の実践者・研究者として、今後将来にわたって必要とされる資質を養うことを目指している。

基本的には受講者が主体的に関わるアクティヴ・ラーニングであり、研究テーマの決め方、研究手順の組み立て方、資料の検索・収集の仕方、図書館の利用スキル等を学びながら、修士論文・修士研究の概要と執筆計画をシミュレートする。またこれに加えて、楽譜資

学修成果

①学位論文執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルを身に付ける。②論理的な文章の書き方を習得する。③図書館やデータベースを駆使して、研究に必要な資料に適切にアクセスする技術を習得する。④楽譜資料の性質を知り、目的に応じた適切な扱いができるようになる。⑤研究を助ける国内の研究施設や研究機関とその利用方法について知る。⑥課題を実施し、発表することで、発表資料の作り方・口頭発表の仕方などプレゼンテーションスキルを身に付ける。⑦一連の学びを通じて、修士論文・修士研究のテーマについて考え、次年度に備えることができる。

授業展開と内容

- 第1回 「音楽の学術的研究」への扉を開ける
～実技系修士に求められる「修士論文」「修士研究」とは／「興味のあること」を「研究テーマ」に進化させるには／自分の「研究テーマ」（仮）を決めるには
- 第2回 「問い」を見つける
～論文の基本的な構成を知る／論文の執筆のために必要なことを知る／問いの立て方を知る／研究計画を立てる／研究に必要な資料の種類と基本文献について知る
- 第3回 研究計画を書く（論文を書くためのシミュレーション）
～各自研究の概要を書き、研究計画についてグループでの発表・ディスカッション・相互評価を行う
- 第4回 文献の表記の原則を知り、文献表の作り方を学ぶ
～さまざまなタイプの資料を扱うための訓練として、グループワークと相互評価を行う／文献表に必要な情報は何かを知る
- 第5回 「資料の森」を歩く
～「ライブラリアンを味方につけるスキル」は研究者の重要な資質／図書館の仕組みと「基本的文献」について知る／データベースの種類と活用方法を知る
- 第6回 楽譜資料の検索と資料批判の基礎①
～楽譜の種類と性質について知る／様々な用語の意味を正確に知る／批判校訂全集と作品目録／楽譜にアクセスする方法／課題の出題と概説
- 第7回 楽譜資料の検索と資料批判の基礎②（受講生の発表を予定）
～バロックの楽譜について知る（バッハ）
- 第8回 楽譜資料の検索と資料批判の基礎③（受講生の発表を予定）
バロックの楽譜について知る（ヘンデル、ヴィヴァルディなど）
- 第9回 楽譜資料の検索と資料批判の基礎④（受講生の発表を予定）
古典派の楽譜について知る（ハイドン、モーツァルト）
- 第10回 楽譜資料の検索と資料批判の基礎⑤（受講生の発表を予定）
古典派の楽譜について知る（ベートーヴェン）
- 第11回 楽譜資料の検索と資料批判の基礎⑥（受講生の発表を予定）
ロマン派の楽譜について知る（シューベルト、ショパン、シューマン、リストなど）
- 第12回 楽譜資料の検索と資料批判の基礎⑦（受講生の発表を予定）
オペラの楽譜について知る（ロッシニ、ヴェルディなど）
- 第13回 楽譜資料の検索と資料批判の基礎⑧
総括／専門家・研究者として楽譜とどう向き合うか
- 第14回 研究資料へのアクセスー学外の研究施設を知る
①国立国会図書館 ②日本近代音楽館（注意：可能な場合は学外授業として①②の現地を訪問するが、それができない場合は、代替の方法で当該施設とその機能について紹介する）
- 第15回 研究資料へのアクセスー学外の研究施設や資料の入手方法を知る
③民音音楽博物館 ④その他の国内外の主要な音楽アーカイヴ（注意：可能な場合は学外授業として③の現地を訪問するが、それができない場合は、代替の方法で当該施設とその機能について紹介する）
- 第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

- ◆表現専攻1年次の必修科目。運営専攻の学生も、興味と必要に応じて1年次又は2年次に選択科目として履修することができる。
- ◆表現専攻の場合、この授業の単位取得が2年次の「課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の履修（すなわち修士論文・修士研究執筆）の前提となるので注意すること。
- ◆この授業をおろそかにすると、以後の学修（修士論文・修士研究の執筆）に明らかな支障が出る。欠席・遅刻厳禁は当然として、自ら問題意識を持って望むこと。また、授業内では積極的に議論に参加し、発言すること。
- ◆グループワークでは、各自が当事者意識と責

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ◆提出課題・発表課題を確実に実施すること。
- ◆割り当てられた発表課題の実施に当たっては、指示に従って計画的に準備を行うよう心がけること。授業外に行うこの発表準備は非常に重要で、教員との打ち合わせの内容、発表準備への取り組み方等も「成果発表」の成績評価に含まれる。
- ◆他学出身者等で図書館の使い方に慣れない者は、図書館が実施するOPACガイダンス（申込制）に各自参加すること。

教科書・参考書

【教科書】は特に定めませんが、各課題を実施するにあたり参照すべき資料は授業内で指示する。

【参考書】

- ①佐藤望 ほか著『アカデミック・スキルズ——大学生のための知的技法入門』（第3版）慶應義塾大学出版会刊
 - ②市古みどり ほか著『資料検索入門——レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊
 - ③大出敦 著『クリティカル・リーディング入門——人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊
 - ④ウォルター・エマリ著『エディションと音楽家』（改訂版）アカデミア・ミュージック刊
 - ⑤椎名亮輔 ほか著『音楽を考える人のための基本文献34』アルテス・パブリッシング刊
- そのほか、文献検索のための様々なデータベースを十分に活用すること。

科目名－クラス名

課題研究 II

曜日時限

火 2時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	前期	1		0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

- ◆修士課程における学修の総括として、修士研究（8,000～12,000字程度）を執筆する。
- ◆修士研究（II）では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識などに基づいて、文献や資料を読み込み、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により議論を展開し、それを一貫した論旨を持つ文章にまとめることが求められる。実技研究と密接に結びついたテーマや、将来さらに発展的な研究につながる予備的研究などが適している。
- ◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、論文に準ずる学術的な文章の基本的

学修成果

執筆の過程を通じて、学術的な研究に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	執筆計画の策定と研究タイトルの決定① 修士研究題目の提出に向けた指導
第2回	執筆計画の策定と研究タイトルの決定② 修士研究執筆計画書の提出に向けた指導
第3回	執筆の予備的作業① 文献表の作成と基礎知識の整理
第4回	執筆の予備的作業③ 研究の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査（「履修上の注意」を参照）の要・不要の確認
第5回	執筆① 序の書き方・序の執筆
第6回	（以下、3章立ての研究を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。他の構成の場合もこれに準じて計画する） 執筆② 第1章のための予備的調査
第7回	執筆③ 第1章の執筆・推敲
第8回	執筆④ 第2章のための予備的調査執筆⑤ 第2章の執筆・推敲
第9回	執筆⑥ 第3章のための予備的調査
第10回	執筆⑦ 第3章の執筆・推敲
第11回	執筆⑧ 結論の執筆と推敲、および全体の論旨の確認と見直し
第12回	執筆⑨ 参考文献表を整える
第13回	執筆⑩ 書式と体裁を整える（注や参考文献表の書式、譜例や図版、本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）
第14回	執筆⑪ 要旨を執筆する
第15回	提出前の最終確認 本文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認 ★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

- ◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
- ◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
- ◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
- ◆修士研究を執筆する年度当初に「修士研究執筆計画書」の提出、「修士研究題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
- ◆研究の執筆に当たっては研究倫理に留意

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
- ◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
 - ①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
 - ②「図書館ガイダンス」への参加
 - ③「研究倫理ガイダンス」への参加
 - ④口頭試問で指摘を受け

教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門—レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門—人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー—プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文・レポートの執筆から文献表記法まで』（改訂新版）春秋社刊

科目名－クラス名

課題研究 II

曜日時限

火 4時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	
演習	2～	前期	1	評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

- ◆修士課程における学修の総括として、修士研究（8,000～12,000字程度）を執筆する。
- ◆修士研究（II）では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識などに基づいて、文献や資料を読み込み、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により議論を展開し、それを一貫した論旨を持つ文章にまとめることが求められる。実技研究と密接に結びついたテーマや、将来さらに発展的な研究につながる予備的研究などが適している。
- ◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、論文に準ずる学術的な文章の基本的

学修成果

執筆の過程を通じて、学術的な研究に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	執筆計画の策定と研究タイトルの決定① 修士研究題目の提出に向けた指導
第2回	執筆計画の策定と研究タイトルの決定② 修士研究執筆計画書の提出に向けた指導
第3回	執筆の予備的作業① 文献表の作成と基礎知識の整理
第4回	執筆の予備的作業③ 研究の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査（「履修上の注意」を参照）の要・不要の確認
第5回	執筆① 序の書き方・序の執筆
第6回	（以下、3章立ての研究を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。他の構成の場合もこれに準じて計画する） 執筆② 第1章のための予備的調査
第7回	執筆③ 第1章の執筆・推敲
第8回	執筆④ 第2章のための予備的調査執筆⑤ 第2章の執筆・推敲
第9回	執筆⑥ 第3章のための予備的調査
第10回	執筆⑦ 第3章の執筆・推敲
第11回	執筆⑧ 結論の執筆と推敲、および全体の論旨の確認と見直し
第12回	執筆⑨ 参考文献表を整える
第13回	執筆⑩ 書式と体裁を整える（注や参考文献表の書式、譜例や図版、本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）
第14回	執筆⑪ 要旨を執筆する
第15回	提出前の最終確認 本文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認 ★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

- ◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
- ◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
- ◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
- ◆修士研究を執筆する年度当初に「修士研究執筆計画書」の提出、「修士研究題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
- ◆研究の執筆に当たっては研究倫理に留意

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
- ◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
 - ①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
 - ②「図書館ガイダンス」への参加
 - ③「研究倫理ガイダンス」への参加
 - ④口頭試問で指摘を受け

教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門—レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門—人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー—プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文・レポートの執筆から文献表記法まで』（改訂新版）春秋社刊

科目名－クラス名

課題研究 II

曜日時限

木 2時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
演習	2～	前期	1	評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト
				評価割合	0	100	0	0	0
									100

教育到達目標と概要

- ◆修士課程における学修の総括として、修士研究（8,000～12,000字程度）を執筆する。
- ◆修士研究（II）では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識などに基づいて、文献や資料を読み込み、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により議論を展開し、それを一貫した論旨を持つ文章にまとめることが求められる。実技研究と密接に結びついたテーマや、将来さらに発展的な研究につながる予備的研究などが適している。
- ◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、論文に準ずる学術的な文章の基本的

学修成果

執筆の過程を通じて、学術的な研究に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	執筆計画の策定と研究タイトルの決定① 修士研究題目の提出に向けた指導
第2回	執筆計画の策定と研究タイトルの決定② 修士研究執筆計画書の提出に向けた指導
第3回	執筆の予備的作業① 文献表の作成と基礎知識の整理
第4回	執筆の予備的作業③ 研究の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査（「履修上の注意」を参照）の要・不要の確認
第5回	執筆① 序の書き方・序の執筆
第6回	（以下、3章立ての研究を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。他の構成の場合もこれに準じて計画する） 執筆② 第1章のための予備的調査
第7回	執筆③ 第1章の執筆・推敲
第8回	執筆④ 第2章のための予備的調査執筆⑤ 第2章の執筆・推敲
第9回	執筆⑥ 第3章のための予備的調査
第10回	執筆⑦ 第3章の執筆・推敲
第11回	執筆⑧ 結論の執筆と推敲、および全体の論旨の確認と見直し
第12回	執筆⑨ 参考文献表を整える
第13回	執筆⑩ 書式と体裁を整える（注や参考文献表の書式、譜例や図版、本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）
第14回	執筆⑪ 要旨を執筆する
第15回	提出前の最終確認 本文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認 ★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

- ◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
- ◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
- ◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
- ◆修士研究を執筆する年度当初に「修士研究執筆計画書」の提出、「修士研究題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
- ◆研究の執筆に当たっては研究倫理に留意

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
- ◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
 - ①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
 - ②「図書館ガイダンス」への参加
 - ③「研究倫理ガイダンス」への参加
 - ④口頭試問で指摘を受け

教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門—レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門—人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー—プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文・レポートの執筆から文献表記法まで』（改訂新版）春秋社刊

科目名－クラス名

博士音楽美学特講Ⅰ

曜日時限

火 4時限

担当教員

有田 栄

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
講義	1～	後期	2	50	0	0	50	0	100

教育到達目標と概要

体系的音楽学の視座から、「西欧における声の美学とその歴史」を扱う。

西欧文化において「声」という概念は、きわめて複雑な哲学的文脈の中に位置している。西欧哲学の伝統において「声」は最も「本質的」なものであり、「存在」の代名詞でもある。「自らの傍らの存在」「最も純粋な自己触発」あるいは「最も根源的な自己への現前」「最も根源的な自己同一性」などと呼ばれ、特権化されてきた「声」の歴史と伝統を知ることによって、西洋音楽史においてなぜ声楽は常に器楽よりも優位とされてきたかといった歴史的問いや、「表現とは何か」という

学修成果

学術的研究において、また博士論文執筆に際して最も重要なのは、「正しい問いを立てること」であるが、本講では、受講者間の議論を通じてその「問い方」を学び、「体系的音楽学」の手法や視座を修得することができる。さらに、文献の講読を通じて、基本的な文献に触れ、体系的音楽学の基礎知識を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回 導入①：体系的音楽学としての「音楽美学」／体系的視座と歴史的視座

第2回 導入②：ヨーロッパにおける「声の美学」とは何か／「声」と形而上学

第3回 ヨーロッパの古層文化における「声」の伝統①
――古層文化における声の意味について知る

第4回 ヨーロッパの古層文化における「声」の伝統②
――古層文化における声の音楽について考える

第5回 キリスト教文化における「声」の伝統①
――キリスト教文化における声の音楽について知る

第6回 キリスト教文化における「声」の伝統②
――聖書の中の「声」と音楽

第7回 キリスト教文化における「声」の伝統③
――ヨーロッパの声の文化における「第1の伝統」と「第2の伝統」

第8回 「声」をめぐる哲学的・美学的論考①
(受講者の予備知識・理解度に応じて課題文献を選択)

第9回 「声」をめぐる哲学的・美学的論考②
(受講者の予備知識・理解度に応じて課題文献を選択)

第10回 「声」をめぐる哲学的・美学的論考③
(受講者の予備知識・理解度に応じて課題文献を選択)

第11回 「声」をめぐる哲学的・美学的論考④
(受講者の予備知識・理解度に応じて課題文献を選択)

第12回 現代の「声の音楽」①
――ヨーロッパの声の文化における「第3の伝統」について

第13回 現代の「声の音楽」②
――様々な「声の音楽」に見る「声の伝統」

第14回 現代の「声の音楽」に見る「声」の伝統③
――なぜ「声の音楽」なのか

第15回 まとめ「ヨーロッパにおける声の音楽の伝統とは何か」

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

定期試験は原則として口頭試問による。適宜テーマに関連する課題を与え、それについて報告・発表・ディスカッションをしてもらおうが、その内容や取り組み姿勢を評価に加える。好奇心と探究心、またつねに目の前の事象に対して「問いかけ」る意識を持って授業に臨むこと。発表の担当者以外も、指定された文献を読み込むなど、事前の予習を欠かさないこと。授業内で発言・コントリビューションのない者は、出席と認めない。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

課題となる文献の予習を、受講者は各自で毎回必ず行うこと。また、指定する文献テキストは、主として日本語であるが、必要に応じて外国語（英語ほか）のものも含むことがある。いずれの場合も、原典を正確に読む力も身に付けること。

教科書・参考書

文献や参考資料については、授業内で指示する。

2021 年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：1628 教員名：有田 栄

1) 評価結果に対する所見

数値として現れた評価の良し悪しに関わらず、アンケート自体の回収率が低いため、現状ではほとんどの科目がごく一部の学生の”個人的な”評価の数値でしかなくなっているのが残念である。ある程度実態を反映した評価を得るには、まずは回収率の向上が必要である。そのために私を含め個々の教員ができる現実的なことは何かを考えたい。

授業内で一定時間をアンケートに割くことは一案だが、学科授業において、定期試験前の1分1秒も惜しい時期に5分から10分の授業時間を割き、さらにそのあとでアンケートから授業へ、スマホから教員へと学生の意識を振り向けさせる時間を取ることはかなり難しい。全員が平常の授業モードに戻るまでに、15～20分はかかるだろう。試験と組み合わせるとアンケートをさせることも可能かもしれないが、試験前に実施させるのであれば全員にスマホをしまわせるまでに時間がかかり、逆に試験後にアンケートをさせるのであれば、途中退出を認める現在の試験方法では混乱が生じる。

さらに実施時期も検討が必要で、科目によっては授業に一貫したストーリーがあり、最終の講義でその最も重要な「オチ」が来るように組み立てる場合も多く、第14回では学生が受講した意味を理解する段階にまだ至っていないと思われるケースもある。評価結果が真に授業の実態を反映し、学生に資する授業改善へと繋がるものにするためには、どのような工夫が考えられるか、今後観察・検討していきたい。(複数教員担当授業については担当外の授業についての判断材料が少ないため、率直なところ良くも悪くもなぜその数値なのかを推測・考察しかねる)

2) 要望への対応・改善方策

「西洋文化史」について「もっと少人数化しては」との意見があるが、教員自身ももとそれが可能であれば、もっと学生とコミュニケーションを取ることができ、扱う内容についてインタラクティブな授業ができるであろうと考えるし、そうしたいと思うが、実際には選択科目とはいえ「背骨科目」としてなるべく多くの学生に履修してもらう必要があるということを優先せざるを得ない。将来万一、よりアドヴァンストな内容の授業を設定することができれば可能かもしれないが、残念ながら現実的ではない。

複数教員担当の「音楽教養演習Ⅰ」開講時限についての要望に対しては、検討の余地があると考えているが、現在の担当教員の配置上難しいのが現実である。座学は基本的に定時に実施されているし、見学授業も定時のコマで実施する機会が多いため、ほとんどの授業回が定時に実施されているはずであるので、現状は集中講義のような扱いにするメリットはデメリットを上回ると考える。ただし、カリキュラムを検討する際には検討材料の一つとしたい。

3) 今後の課題

Teams を活用して、学生が感想や質問を気軽に呟くことができるようにしたい。また、授業時間を補うために、「もっと詳しく知りたい人のために」という動画またはスライド等を用意できるようにしたいと考えているが、実際にはそうした教材作成のための時間がほとんどないのが実情であるが、何とかできないか考えてみたいと思う。

以上